

安部公房の読者のための通信 世界を変形させよう、生きて、生き抜くために！



月
刊

もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2013年11月30日初版 同年12月3日第二版 第15号 <http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい

『テアトロ』12月号に「安部公房」特集

総合演劇雑誌『テアトロ』の2013年12月号に、「安部公房没後20年によせて」特集が掲載されました。内容は、大橋也寸「孤独・詩的想像力」（4ページ）、丸山善司「ノーベル症候群に御用心」（2ページ）、岩波剛「日本アバンギャルドの第一走者」（2ページ）、山口果林「演劇人・安部公房」（4ページ）です。

日本近代文学館に「もぐら通信」が収蔵されています

公益財団法人・日本近代文学館に「もぐら通信」が収蔵されています。大学図書館検索CiNiiで検索できます。<http://ci.nii.ac.jp/ncid/AA12603574>

コロンビア大学図書館に「もぐら通信」が収蔵されます

別掲のドナルド・キーン先生のお葉書およびキーン誠己氏のご連絡により、キーン先生がコロンビア大学東アジア図書館に「もぐら通信」をご寄贈下さり、先生の貴重な「安部公房資料」の中に含めて収蔵されることになりました。先生のご配慮に深く感謝いたします。

鳥羽先生の近著『安部公房 メディアの越境者』

12月10日頃、早稲田大学大学院教授 鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』（森話社、定価3600円＋税）が刊行されます。国内外の研究者や関係者による、安部の演劇、映画、ラジオドラマ、テレビドラマ、写真などの多メディアにわたった活動についての論集です。



『砂の女』がAmazonのオールタイムベスト小説100に選出

新潮文庫の100冊の常連だった『砂の女』がAmazonのオールタイムベスト小説100に選出されました。新潮文庫だけでなく、Amazonで取り扱っている書籍の中から選ばれたので、いかに『砂の女』の人気の高いかを示したことになります。：<http://goo.gl/SPH5un>

国立国会図書館に「もぐら通信」を納入することになりました

国立国会図書館オンライン資料収集制度に基づき、「もぐら通信」では納入の申請をしていましたところ、11月20日に国会図書館より「当館の収集対象であることを確認しました。」と「受付完了」のご返事をいただきました。今後は定期的に「もぐら通信」の掲載サイトが巡回・収集されます。

関西安部公房オフ会（KAP）の読書会が開かれます

関西安部公房オフ会の第5回読書会は、12月14日（土）午後1時～5時、JR花園駅近くの京都市右京ふれあい文化会館にて開かれます。課題は『密会』です。前回同様の活発な交歓が期待されます。<http://wlallen.seesaa.net/article/377944769.html>

東京で『方舟さくら丸』読書会を開催します（東京・安部公房・パーティー・ミーティングvol.22）

東京・安部公房・パーティー（通称TAP）による読書会のお知らせです。今回の課題本は『方舟さくら丸』。

日時 12月21日 会場 荻窪ベルベットサン (<http://www.velvetsun.jp>)
開場 16:30 開始 17:00
料金 1500円 (w/1Drink)

読み途中、未読でも問題なし！ 安部公房ファンなら誰でも参加できます。予約・詳細はこちらのアドレスをごらんください (<http://atnd.org/event/E0022190>)。

前回の「『無関係な死・時の崖』読書会」の様子は、こちらのアドレスから録画をごらんいただけます。 (<http://www.ustream.tv/recorded/39048741>)

尚、終了後は付近の居酒屋で二次会（忘年会）を予定しております（料金3500円程度を予定、学割有）。

うずめ劇場 第26回公演 「砂女←→砂男」

原作：安部公房／E. T. A. ホフマン 演出：ペーター・ゲスナー／天野天街（少年王者館） ■公演期日 2014年 2月7日～11日 昼・夜1回づつ計10回（『砂女』5回、『砂男』5回） ■公演会場 ザ・スズナリ（下北沢演劇祭参加）
うずめ劇場のオフィシャルサイト：<http://uzumenet.com> ■劇団や演出家
ペーター・ゲスナーへの取材の受付、練習の公開を行っています。連絡はご
担当の荒井さん迄：arainobita@gmail.com ■観劇したいという方を20名
限定で無料ご招待します。「砂女」の単独のチケットか「砂女←→砂男」の
両方の公演が観られるチケットの2種類いずれか。申込は同じく荒井さん
迄：arainobita@gmail.com



辻井喬さんが亡くなりました。

【訃報】安部公房の盟友であり、理解者・支援者であられた辻井喬（本名：堤清二）さんが11月25日に亡くなりました。86歳でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。辻井さんは安部公房が肝胆相照らした三島由紀夫をも深く理解した方でした。創刊以来「もぐら通信」をお送りしていました。



目次

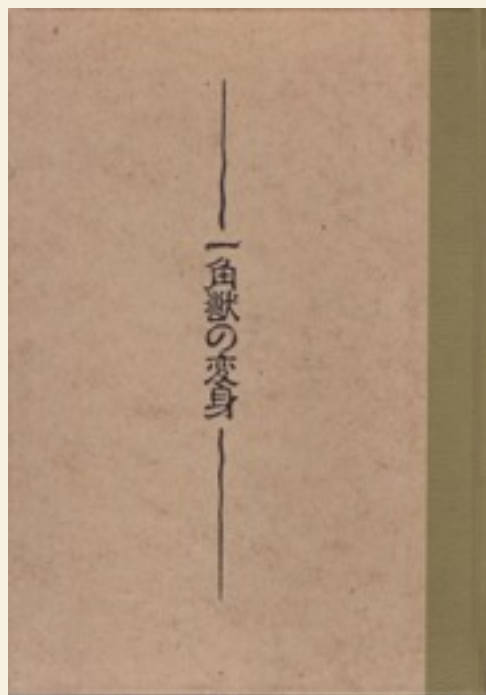
- 1。表紙ニュース...page 1
- 2。目次...page 5
- 3。『一角獣の変身』における1963年の安部公房：秋川久紫...page 6
- 4。ドナルド・キーン様からのお葉書...page 10
- 5。創作の秘密：滝口健一郎...page 11
- 6。安部公房没後20年記念講演会報告：澤井佳彦...page 13
- 7。頭木弘樹様からのお返事：編集部...page 15
- 8。安部公房『密会』論—絶望の書として—：嵐志保...page 19
- 9。『飢餓同盟』小論：wlallen...page 35
- 10。『けものたちは故郷をめざす』と表現者安部公房：稲垣健...page 38
- 11。安部公房の愛の思想（5）：HIROSHI OKADA...page 40
- 12。『私の本棚より』：『石川淳対談集 夷齋座談』：岩田英哉...page 44
- 13。質問箱...page 48
- 14。安部公房の変形能力13：シュールレアリズム：岩田英哉...page 49
- 15。もぐら感覚17：笛：タ克蘭ケ...page 67
- 16。読者からの感想...page 84
- 17。合評会...page 86
- 18。本誌の主な献呈送付先...page 86
- 19。もぐら通信の収蔵機関...page 86
- 20。個人情報保護方針...page 86
- 21。編集方針...page 86
- 22。バックナンバー...page 86
- 23。編集者短信...page 87
- 24。編集後記...page 88
- 25。次号予告...page 88
- 26。第二版訂正箇所...page 89

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

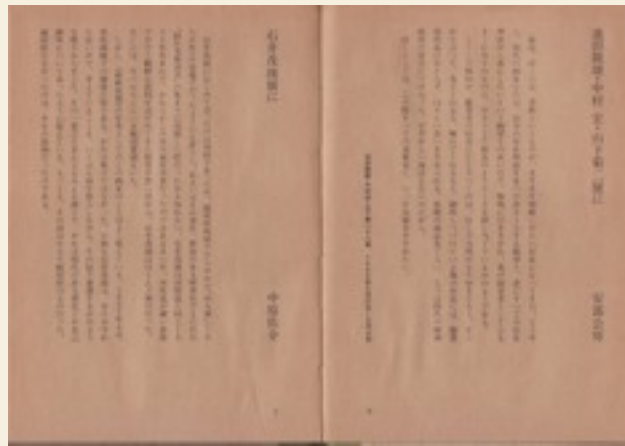
『一角獣の変身』における1963年の安部公房

秋川久紫

つい最近、俳人・花森こまさんの個人誌『逸』に掲載するため、武邑くしひさんの第一句集『TÉNERÉ』に関する論評を書いたのだが、その際に句集のイメージから連想して、ふと書棚の奥から引っ張り出して来た一冊の風変わりな冊子がある。それは、1986年の秋に銀座の青木画廊が作家や美術関係者、コレクターなどに無償で配布するために発刊した『一角獣の変身』というタイトルの冊子なのだが、そこには1961年の開廊以来、青木画廊で開催されて来た幻想レアリスム作家たちの展覧会に寄せて、様々な文学者たちが詩や散文を寄せている。表紙も中身も全てクラフト紙により作られたその冊子は、猥雑でエネルギーに満ちた昭和後半の前衛芸術の一面を彷彿とさせて余りあるもので、その中心的な執筆者はアンドレ・ブルトンとも親交のあったシュルレアリスト・瀧口修造、マルキ・ド・サドの翻訳で知られる仏文学者・澁澤龍彦、そして造型とエロスの詩人・吉岡実であった。この冊子の発刊当時、未だ24歳の若造だった私は、その頃、美術雑誌の編集者の職にあり、自身の詩の創作においては澁澤龍彦と吉岡実の強い影響下にあったことから、先輩の編集者から幸いにもこの冊子をもらい受けた折りには、その僥倖に狂喜したものである。



さて、その『一角獣の変身』には全部で33篇の詩や散文が収められているのだが、その2篇目に思いがけず安部公房の名前があるのを発見して、驚いた。28年前にこの冊子を初めて手にした時、この冊子の中心をなす瀧口修造（10篇）・澁澤龍彦（5篇）・吉岡実（4篇）や、堀口大學（2篇）、種村季弘（1篇）、吉増剛造（1篇）、高橋睦郎（1篇）らの名前が真っ先に飛び込んで来たため、そこに安部公房の名前があったことにまるで気付いていなかったからである。



その安部公房の散文はいずれも当時気鋭のアヴァンギャルド芸術の表現者であった「池田龍雄・中村宏・山下菊二3人展」（1963年5月27日～6月8日）のために書かれたものである。
短いものなので、以下にその文を紹介する。

「池田龍雄・中村宏・山下菊二展に

（前略）

どうやら、現代の画家たちは、自分の存在理由を見つけ出そうとする願望と、逆にすべての存在理由から逃亡したいという絶望とのあいだで、無残にひきさかれ、美の殺害者としてふるまう行為そのものに、かろうじて創造のよりどころを探し当てているかのようである。

こうした傾向が、鑑賞者の拒否にたどりつくのは、むしろ当然のなりゆきだろう。そうかと言って、見てくれるなど、絶叫しつづけている類の作品には、鑑賞用作品におとらず、白々しい思いをさせられる。拒絶の商品化くらい、じつは

じつは時代の精神状況の盲点につけ入った、小ざかしい商法もないのだから。
ぼくとしては、この際すべての美術家に、いっそ自殺をすすめたい。」

この文章を書いた時点の安部公房は未だ39歳。前年に「砂の女」を書き、この年に読売文学賞を受賞したばかりの頃で、約40年にわたる執筆活動の中では、未だ前半と言っていい時期にいる。これに対して、この文章を寄せられたアヴァンギャルドたちの年齢は、池田龍雄が34歳、中村宏が30歳、山下菊二が43歳である。彼らはこうして挑発的とも言える文章を安部から寄せられ、仕舞いには思い掛けず自殺まで迫られて、どのようにこれを受け止めたのだろうか？

私がこの文章を読んで最初に感じたのは、『一角獣の変身』の中で、この安部のものだけが異質であり、少なくとも美術家を賛美するような姿勢では書かれていない、ということである。かの澁澤龍彦が四谷シモンや金子國義について自らの偏愛をもって語っているのとは訳が違っている。独文学者・種村季弘がホルスト・ヤンセンについて様々な画家と比較しながら熱心にその芸術の本質を解き明かそうとしているのとも、全く違う。もちろん、詩人である吉岡実や吉増剛造や高橋睦郎による画家たち（小沢純・松井喜三男・渡辺隆次）に対する詩的言語による独自のアプローチとも、まるで違う。

まず、この文章の中にある「美の殺害者としてふるまう行為」という表現は、ダダイズムの先駆者・マルセル・デュシャンの「自転車の車輪」（1913年）や「泉」（1917年）といった作品を想起させる。前者は既製の自転車の車体の一部を台所用の白い丸椅子に上から垂直に突き刺したものであり、後者は既製の洋式便器をそのままオブジェとして展覧会場に展示したもので、とりわけ後者は発表された当時、美術界に一大スキャンダルを巻き起こした。視覚的な美しさや作家の熟練した技術といったものを否定し、芸術の価値そのものを転覆させるような試みは、現代美術の流れに多大な影響を与え、20世紀の美術史に大きな足跡を残したが、今やダダイズムやシュルレアリスム、ポップ・アートの作品ですらも、一つの「古典」として、近代美術館の常設展示の中に収まるようになり、それらの非常にショッキングだったはずの美術運動も、もはや完全に過去の出来事になってしまっている。

そうした西洋の美術運動の影響下にあって、当時の日本美術界の一部を席卷していた若いアーティストたちのエネルギッシュな運動が、当事者たちの意図に反していずれ廃れていくであろうことを予期しているかのように、安部はここでアヴァンギャルドたちに一定の距離を取って接しているように見える。その後続く「鑑賞者の拒否」の文脈も、実は安部自身がこれらの美術運動や、池田・中

村・山下らの「美の殺害者としてふるまう」作品そのものに違和感を持っているために書かれた面がある、と言ってしまったら深読みになるだろうか。

加えて「拒絶の商品化くらい、じつは時代の精神状況の盲点につけ入った、小ざかしい商法もない」という部分も見逃せない。安部はここで、恐らく芸術運動が「発見」された後に、何らの検証もなされずに「反復」される過程に見られる「思想の喪失」「理念の軽薄化」といったものを予知して、これを冷めた眼で批判しているのではないだろうか。

デュシヤンの試みを起源として1960年代から1970年代に世界中で展開されたコンセプチュアル・アートの手法には、元々最初に価値観を転覆し、人々を驚かせる時には意味があるが、繰り返されるうちに徐々にコンセプトの意味合いが薄れてゆき、当初は高邁な理念にもとづいていたはずの表現も、やがてそこから思想的なものが失われて、単なる傍若無人の振る舞いと何ら変わらないものに堕してしまう、といった宿命がある。当初は革新的だったはずの「発見」も、「反復」の過程を経ることによって、いずれ「思想の喪失」「理念の軽薄化」を余儀なくされてしまう危険があることを安部は正確に認知していたのだと思う。

さらに安部は、この文章の最後で「すべての美術家に、いっそ自殺をすすめたい」としているのだが、これは非常に強烈なアイロニーであり、要は「安易に自己否定（美術の否定）をするくらいなら、本当に死んでみたらいい。それくらいの覚悟がなければ、美の殺害者としてふるまうな。」と言っていることに他ならない。一方で安部が池田と親交があり、文学者としても一時期シュルレアリスムを指向していた、という見方もあることは承知しているが、この1963年の『一角獣の変身』に収められた安部の文章を読む限り、少なくとも当時の日本の前衛美術の状況に対して、安部が余りこれを肯定的に捉えておらず、あるいは真の意味で満足しておらず、これを批判的・懐疑的に見ながら、一定の距離を置いて眺めていたと言えるのではないだろうか。

[編集部注：本論で触れられている安部公房の文章は、安部公房全集第17巻所収『最近、ぼくには』のエッセイのことです。]



ドナルド・キーン様からのお葉書

編集部

いつも「もぐら通信」をお読みいただき、ご支援して下さっているドナルド・キーン様から、編集部にお葉書をいただきました。許可を得ましたので、読者の皆さまにもこの貴重なお葉書を紹介させていただきます。

〈本文〉

もぐら通信を頂きましてありがとうございます
現在石川啄木について原稿を書いていて当分の間、他の本を読めません。
ということ感想を書けません。
コロンビア大学の図書館に寄贈することに致しました。
これから安部公房の文学に関心のある学生が参考にすることを望みます。

十一月十四日



創作の秘密

滝口健一郎

「言葉じゃなくてイメージなんだ。それを拾いだしてきて捕まえて造形し、こねあげていく。たれ目の女の子が三人出てくる。なぜたれ目なのか、三人が同じ人物かどうかはわからない。そういう答えられないものの分量がぎっしりあれば、その作品はすぐれていると僕は思う。そういうものだけで構築されているのが本当は望ましい」

小説『カンガルー・ノート』発表後に語られた創作の秘密。

「見えてくるんだよ、作家には。降ってくるように見えるんだ。そうした時が一番本物。待っていてもなかなか降ってこないけれど、若い時は体力と粘りで降ってくるのを待つだろうし、僕みたいに キャリアが重なってくると降ってきそうなタイミングがわかってくる。僕は見えてくるまでは書かない。頭だけで書いたものは面白くないよ」

見えてくる…実体がイメージ（映像）となって脳裏に浮上してくるようだ。

「過飽和食塩水に種を入れて、静かなところに一晚置いておくと核に余分な塩がついて結晶になっていく。頭を拡散した状態においておくと何かの弾みにちょっと結晶がで始める。どこにできるかは分からないんだ。最初は書いては捨て、書いては捨てするんですよ。とにかくつらくてもじっと待っている。俗にいうインスピレーションというやつだろうね。もちろん食塩水を過飽和まで溶かしこんでいるからできるんだけど」

見えてきたものを言語化していく……

「僕は作家というのは本来はそういうものを持つ人間のことだと思う。そうでない人は字書いて食っているみたいだけれど、作家かどうかは疑問だな。資質だよ。僕なんていうのはそういう部分がなかったら書こうとしなかったと思う」

最近気になる安部公房の創作の秘密。上記の言葉を、繰り返し、繰り返し読んでみる。脳裏に浮かんだイメージ（映像）をこねあげていく…書いては捨て、書いては捨て…だれにでもできることではなさそうだと、思いつつ、ついつい「安部公房」作品（小説）を読んでしまう…勇気がわく…錯覚なのかもしれないが、わたしにもできる（書ける）のではないか？かすかな衝動が芽生える…書きたくなる気にさせてくれる魔力が安部文学には宿っているように思える……

（＜安部公房さんに聞く＞「毎日新聞」の談話記事 『安部公房全集』029
228ページ）



ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。

次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

安部公房没後 20 年記念講演会報告

東鷹栖安部公房の会 澤井佳彦

9月14日に旭川市東鷹栖公民館にて「安部公房没後20年講演会～ゆかりの地で安部公房を偲ぶ～」が開催されました。「東鷹栖安部公房の会」と東鷹栖公民館とが共催したものです。85名と大変多くの方が来場されました。

講師は地元出身の東大名誉教授・保坂一夫さんで、講演のテーマは「安部公房にとって故郷とはなにか」という大変興味深いものでした。

講演内容は保坂さんが実際に接した安部公房のエピソードから安部文学の本質の鋭い洞察まで硬軟織り交ぜたもので、内容の一部を紹介しますと以下のようでした。

- ・保坂さんが参加された安保についての集会での安部公房の発言
「みんなは混沌だ混沌だと言っているけどさ、僕にとっては最初から世の中混沌しかなかったんだよな」
- ・安部公房が保坂さんに語った大江健三郎の評（昭和30年代）
大江氏が安部宅に来た際にピアノが弾けると言いつつ、なかなか弾かなかったエピソードを保坂さんに話し、
「これが大江の文学なんだよ。何事も始まりそうが始まらず、始まる前でうろうろしている人物が基本的テーマなんだね」
- ・保坂さんが安部宅を訪問し、公房が留守だったので母・ヨリミさんと世間話をしていた際のヨリミさんの言葉
「公房さんて詩人でしょう。私は詩人だと思うんだけど・・・」
- ・中野の10畳1間のアパートに妻、母、妹と暮らしていたときはカーテンで4つに仕切っていた。そのときのことをふざけた安部公房の言葉
「うちには部屋が4つあって、カーテンを開けて隣の部屋に行くんだよ」
- ・リルケの『形象詩集』にある詩「秋」の一節の中の「ひとりのひと」とは神様のようなもの、一般化すれば漂泊する個々の存在を支えてくれる大いなる力である。短絡的には、この詩を一番好きだと言っていた安部公房は

本音では故郷に受けとめてほしかったのだと説明することもできる。



また、『終りし道の標べに』、『砂の女』、『他人の顔』や『砂漠の思想』などを例示して、安部文学は、基本的に、（妻や周辺者、あるいは故郷に代表される）人間を捕捉しようとする農民型定住者集団の作り上げる精神構造から逃げ続けていて、どこかに自分の故郷を空想的に作り上げようとしたものである、との洞察を紹介されていました。

最後に、私達聴衆に「東鷹栖や旭川の人達が安部さんを引き寄せようとする」と安部さんは逃げて行くから、こちらからうまく引き寄せる方法を考えないと」との貴重なアドバイスも頂き、「東鷹栖安部公房の会」の名誉会員にもなって頂きました。



頭木弘樹様からのお返事

編集部

[編集部註]当編集部では、寄稿者全員にお礼と感想を送らせていただいております。今回、頭木弘樹様よりお返事があり、かつ掲載可のお言葉を頂いたので、記事として掲載する運びとなりました。以下、頭木様のお返事と編集部からのお礼状を掲載します。

1. 頭木様からのお返事 「もぐら通信」編集部の皆様へ

頭木弘樹です。
お世話になっております。

今回もご感想をお送りいただきまして、
ありがとうございます。

人の文章の感想を書くのは、
かなり難しいと思います。
面白くても、難しいですし、
面白くなければ、なおさらですし。

それをこんなに素晴らしい感想を、
寄稿者全員にお送りになっているとは、
なんとも頭の下がる思いです。
これにかかる時間と労力だけでも、
大変なのではないかと思います。

こんなに編集方針の素晴らしい編集部は、
他にないと思います。

大変だと思いますが、

今後も期待しております。

なお、
「眼には眼を」は、
松本清張も「戦後の洋画で印象に残るのを一つだけ挙げよ」という質問に、
この映画を挙げていて、
『霧の旗』は、この映画をもとに書かれたということを、
その後、知りました。
安部公房と松本清張に、こんなつながりがあった、
『砂の女』と『霧の旗』に、もしかするとこんなつながりがあった、
というのは、
面白いですね。

今後もどうぞよろしくお願いいたします。

2. 編集部からのお礼状

頭木弘樹様

お世話になります。岡（wlallen）です。

編集部一同のお礼が集まりましたので、改めてご寄稿に対するお礼を
岩田、岡、岡田の順（五十音順）にて述べさせていただきます。
厚かましいですが、またのご寄稿楽しみにしています。
貴殿のさらなるご健勝をお祈り申し上げます。

[岩田英哉]

いつもながら、頭木さんの映画に関する批評文は、啓蒙されることが多く、映画に疎いわたくしには、未知の領域への「水先案内人」という感じが致します。

DVDのジャケットは、時代を感じさせて、その時代でなければ、多分このような映画の撮影はできなかったであろうという感慨を催させるものがあります。
この映画評を読んで思うのは、当時の安部公房の実に精力的な活動振りです。
また、インターミッションと題しての、この映画監督についての紹介も、あり

がたかった。

そして、原作者がアルメニア人だと書いてあるのを見て、わたしは成る程と思いました。アルメニア人ならば、このような話を拵えることは不思議ではないと思います。

と、そう思って読み進めて行くと、安部公房の言葉として、「眼には眼を」のやや因果を無視したやり方は、考えてみるとそうした不条理流の断絶ともすこしちがうような気がしてくる。あとで、シナリオにも協力している原作者のヴァエ・カチャがアルメニア人であることを知り、なるほどと思ったわけだ。」とあり、やはり安部公房も同様に思ったことがわかります。

最後のところでの安部公房のサイドに関する評言は、全くその通りで、白人種の他の文明への見方はいつもそのようであり、特に近世以降は一言で言えば植民地をみるものの見方なのではないかと思います。逆にわたしたち日本人もまた白人種の文明を、植民地ではありませんが、憧憬の対象として自画像を重ねて来た訳です。しかし、それは否定さるべきものではないとわたしは思っています。

色々なことを考えさせられる、豊かなご寄稿でした。

どうも、ありがとうございました。

[岡篤史]

いや、困りますね。こんな文章を書かれては。だって、詳し過ぎて、映画を一本観た気になってしまいます（笑）。しかも、安部公房の批評を下敷きにして、頭木さんの文章が丁寧に書かれています。

映画の評価に厳しい安部公房が、恐らく2番目に好きだと思わるのが、この「眼には眼を」なのですね。

「砂漠の思想」が、「チチンデラヤパナ」の前に発表されていることに驚きました。「チチンデラヤパナ」や「砂の女」に、この映画が多少の影響はあったのかも知れないとの指摘は、極めて重要だと思います。

終わらない植民地支配の問題が、本作の根底にあるのかも知れません。頭木さんが「誘惑者」を挙げているように、ヴァルテルとボルタクの二人の奇妙な同行が、是非観てみたいと思いました。

ヴァルテルに過失がないのに、ボルタクから言われのない責めを受けるのは、やはり「砂の女」を連想してしまいます。

また、監督、主演、原作者などの解説も詳しく書かれていて、とても充実した一作だったと思います。

「忘れられた人々」とあわせて、「眼には眼を」を観てみたいと思います。

小誌へのご寄稿、本当にありがとうございました。
またのご寄稿、お待ちしております。

[岡田裕志]
頭木弘樹様

いつも「もぐら通信」を気にかけて下さり、誠に有り難うございます。
第13号にご寄稿いただきました「アンドレ・カイヤット「眼には眼を」」につきまして、厚くお礼を申し上げますとともに、たいへん遅くなりましたが感想を述べさせていただきます。

先日アンドレ・カイヤット監督の映画「眼には眼を」がTSUTAYA ONLINEで復刻販売が始まりました。このタイミングで頭木さんがその解説を書いて下さいます、とてもありがたいです。

随所に安部公房の言葉が引かれていて、とても楽しく読ませていただきました。なかでも安部公房の書いたあらすじはさすがに要を得て簡潔明快で、それに頭木さんの言葉が重なって行って、独特の映画紹介になっています。

結末に行く前にインターミッションとして挿入された話も適切で、この一息入れるのは親切だと思いました。

あまりに丁寧な解説で、もう映画を観たような気になっては困りますが、もちろん映像は言葉を超えるものですから、自分の目で観て感じることは必要で、いずれこの映画を観れることを楽しみにしています。

文中、ことに心に響いてきたのは「ここまでの復讐をされるほど、医師はひどいやつだろうか？」という言葉で、個人の善悪を超えた憎悪の源を考えさせられます。その割り切れ無さは観る者の心に残り続ける、そのことがこの映画の目指すものだったのでしょうか。それは以前に私が書いた「ポストコロニアル」の問題でもあり、興味深いところです。

頭木さんの解説によって導かれ、このようなことを考えさせられました。
有り難うございました。

―――以上―――

安部公房『密会』論

—絶望の書として—

梅花女子大学卒業論文 1998/01

嵐（旧姓入江）志保

〔編集部注：安部公房の後期の作品『密会』については、納得のいく評価をほとんど目にすることがありません。そのような世評を受けている作品を過去に卒業論文にされた読者の方から当時お書きになった論文を今回ご投稿戴きました。編集部で検討した結果、安部公房の作品の意図をよく把握しておられると考えましたので、掲載させていただくことになりました。なにぶん長い文章ですが、安部公房全集も刊行し始めた頃で、『密会』が所収されている第26巻が未刊行の時期にこの論文をよくお書きになったことと、またそれ故にその資料的価値をも考慮し、敢えて全文を掲載させていただきます。〕

目次

はじめに

第一章 弱者社会としての『密会』

- 第一節 《患者》
- 第二節 《溶骨症》の少女・《仮面女》
- 第三節 《副院長》・《女秘書》
- 第四節 《逆進化》

第二章 「都市」の縮図としての『密会』

- 第一節 《弱者》の病
- 第二節 「都市」の病
- 第三節 《男》
- 第四節 「都市」の可能性

おわりに

はじめに

『密会』は、一九七七年十二月、新潮社より刊行された。この作品は、安部の後期の代表的な作品であるにもかかわらず、それが単独で論じられているのは、林晃平氏の「一人だけの“密会”論」（一）と、山田有策氏の「ぼく一人だけの『密会』」（二）の二論のみである。

林晃平氏の論は、『密会』が、『甲賀三郎伝説という一つの物語』や『所謂イザナキ・イザナミの黄泉国の話』に似ているとするものであり、『密会』とそれぞれの話とを比較することによって、『密会』について考察しようとしたものである。

山田有策氏の論は、安部が『密会』で、『病院という迷宮』を舞台に『限りなく発展し続ける医学と拡大拡散し続ける性』とを『描こうとした』とするものであり、この作品の舞台や、時間、聴覚の設定について考察したものである。山田氏は、その設定については『申し分ない』としながらも、『最も中心となすべき医学と性』という主題が、『結局はグロテスクでスラプスティックとも言えるドラマを生み出すだけに終わっている。』とし、この作品を否定的に見ている。

ところで、山田氏の論に限らず、書評などでも、『密会』は、否定的に扱われることが多い。しかし、安部という作家を知る上で、『密会』を論じることはきわめて重要であると思われる。

安部は、その後期においては、抽象的な人間関係を有する空間である「都市」に、自由（平等）への可能性を模索し、作品を書きつづけてきた作家であると言える。そして、この『密会』の世界は、まさに現代の「都市」の縮図としてあり、そこには、「都市」に自由（平等）への可能性を見出せなくなってきた安部の暗い絶望が込められていると考えられる。だからこそ、『密会』について論じることはきわめて重要であると思われるのである。

それでは、『密会』の世界について見てみることにする。

第一章 弱者社会としての『密会』

第一節 《患者》

『密会』の舞台は病院である。そこには、当然、多くの《患者》がいる。まず最初に、『密会』における《患者》について見てみることにする。

《患者》は、言うまでもなく病気である。したがって、一般的に、《患者》

は病気である以上、自分の生命を守るために、《医者》に頼り、服従するしかない。

《患者》と《医者》との関係について、安部はインタビューで次のように語っている。

《現実の問題として、医者は肉体に関する技術者で、患者に対してはきわめて傲慢にふるまう。一方、患者は医者に対してどうしても卑屈になる。両者の間には看守と囚人みたいな支配、被支配の関係がでてくるんだ。》（三）つまり、《患者》は病気であるというだけで《弱者》であり、《医者》という《強者》によって支配されていると考えられる。両者の間には、《支配、被支配》という支配関係が生じるのである。

『密会』における《患者》も例外ではなく、《医者》という《強者》によって、支配されていると言える。《男》の妻の収容に立ち会った守衛の《「まがりなりにも相手は医者なんだよ。」（略）「お互、カルテの患者評価欄に、めったなことは書かれないじゃないか。」》という言葉からも、それがうかがえる。

また、『密会』の病院には《病院全域をほぼ漏れなく監視下においている》という《盗聴システム》が張り巡らされているが、『密会』の《患者》は、この《監視者》によっても、管理、支配されている《弱者》であると言える。

つまり、『密会』における《患者》は、《医者》と《監視者》という《強者》によって支配されている《弱者》であると考えられるのである。

第二節 《溶骨症》の少女・《仮面女》

次に、《患者》の中でも「真の患者」＝「最弱者」であると考えられる、《溶骨症》の少女と《仮面女》について見てみることにする。

まず、《溶骨症》の少女についてだが、彼女は、その名のとおり《骨が流体化していく、やっかいな病気》にかかっている。したがって、少女は、彼女が入院している《軟骨外科の部長も兼任している》《副院長》の治療を受けなければ、《人間の形》を保つことが出来なくなる。（実際に、《男》に連れ出され、《副院長》の治療を受けられなくなった少女は、《ふくらませすぎたゴム人形のように変形してしま》う。）

先に述べたように、《患者》は病気であるというだけで《弱者》であり、《医者》という《強者》によって支配されていると言える。しかし、《溶骨症》の少女の場合は、《副院長》の治療を受けなければ、《人間の形》すら保

てなくなるのである。したがって、《溶骨症》の少女は、一般の《患者》よりも《強者》による支配力が大きく、それゆえ、少女の《強者》に対する服従心も強いと言える。少女は《副院長》の娼婦であり、彼のために《発情した猫の役を演じ》るが、それも自身の《人間の形》を保つためであると考えられる。

《溶骨症》の少女は、《副院長》という《強者》にとっては、絶対に逆らうことのない《理想の患者》なのである。そして、これらのことから、《溶骨症》の少女は、患者の中でも「真の患者」＝「最弱者」であると考えられるのである。

次に、《仮面女》についてであるが、彼女は、先に述べた《溶骨症》の少女よりも、さらに、「真の患者」＝「最弱者」であると考えられる。（《溶骨症》の少女は、後に《副院長》を裏切ることになる。）

《仮面女》は、病院創立記念祭の出し物であるオルガスム・コンクールの出場者（優勝するらしい）で、《名称どおり、顔だけ白くマスクのように塗ってある。》が、どうやら《男》が必死に捜していた、《男》の《妻》らしい。彼女は、《強姦の恐怖から逃れるため》に《防衛的発情》を始め、《人格放棄からくる患者病》にかかり、《ずうっとオルガスム寸前の状態が続いているらしい》のだ。

つまり、《仮面女》は自分の身を守るために、自ら人格を放棄し、《患者》となったのである。その点で、《仮面女》は《患者》の中でも、自ら人格を放棄し、《強者》に対して絶対的に服従する「真の患者」＝「最弱者」であると考えられるのである。

《溶骨症》の少女は、自身の《人間の形》を保つために、支配者である《強者》に対して決して逆らわない。《仮面女》は、自分の身を守るために、人格まで放棄して、《強者》に対して絶対的に服従する。両者とも、一般の《患者》よりも、《強者》による支配力が大きく、それゆえ、《強者》に対して決して逆らわない。《強者》にとって、彼女たちは、理想的な「真の患者」＝「最弱者」であると言えるのではないだろうか。

第三節 《副院長》・《女秘書》

これまで、《医者》や《監視者》という《強者》によって支配されている、《患者》という《弱者》について見てきたが、次に、《患者》を支配する側の《強者》であると考えられる《副院長》と《女秘書》について見てみることにする。彼らは、ともに《強者》でありながら、同時に《弱者》でもあると考え

られる。まず、《副院長》について見てみることにする。

《副院長》は《医者》である。したがって、《患者》を支配しているという面においては、《強者》であると考えられる。先に述べた、《副院長》と《溶骨症》の少女との関係において、それが端的に示されている。

しかし、《副院長》は《医者》という《強者》でありながら、同時に、《患者》という《弱者》でもあると考えられる。《副院長夫妻は結婚したその日から、すべての会話を嘘発見器で確認しながら行うという、風変わりな取り決めをし》、そのために、《副院長》は《人間関係神経症》という病を患い、《ひどいインポテンツにおちい》った。

つまり、《副院長》は《医者であると同時に、別居中の妻の患者でもある》のである。そして、その《インポテンツから回復》するために、《副院長》は《まともな他人の下半身を借り》、《馬》となるのである。

次に、《女秘書》についてであるが、彼女も、《副院長》と同じように、《強者》でありながら《弱者》でもあると考えられる。彼女は、《副院長》の秘書であり、《盗聴システム》によって《患者》を支配する《監視者》のうちの一人である。その面では、《女秘書》は《患者》という《弱者》を支配する《強者》であると考えられる。しかし、彼女もまた、《副院長》と同じように、《患者》という《弱者》でもある。《女秘書》は《試験管ベビー》であり、《人間どうしの関係感覚とでも言うべきものが、完全に欠落してしまっ》ており、そのために、《不感症》に陥っている。彼女は、《心身ともに理想的な結合》の期待を《男》に抱き、彼と関係を結ぶことに必死になる。

《副院長》も《女秘書》も、《患者》という《弱者》を支配するという面においては、明らかに《強者》であると言える。しかし、彼らは《強者》でありながら、自らも《患者》という《弱者》なのである。つまり、《副院長》と《女秘書》は、《強者》であり《弱者》でもあるという、二面性をもった存在であると考えられるのである。

『密会』の病院で働いている人間は、彼らに限らず、《耳鼻科や皮膚科や精神科など》、さまざまな《患者》たちによって構成されている。『密会』の病院は、《強者》でありながら《弱者》である、《弱者》でありながら《強者》であるという、二面性をもった人々によって支配されていると言える。

第四節 《逆進化》

ところで、この『密会』には、《逆進化》の論理が取り入れられている。そ

して、その《逆進化》は、《馬人間》になった《副院長》が、《オルガスム・コンクール》の優勝者に《仮面女》と《交尾》をすることによって、《究極の姿》として示される予定になっている。次に、その《逆進化》について見てみることにする。

《逆進化》について、安部は次のように語っている。

《動物の進化の法則は適者生存だね。だから弱者の淘汰が行われる。ところが人間の進化は「逆進化」なんだ。つまり人類の歴史は弱者の生存権の拡張だった。社会の能力が増大すればするほど、より多くの弱者を社会の中に取り込んできた。弱者をいかに多く取り込むかが文明の尺度だったとも言える。そうすると民主主義社会の最終的イメージは、弱者の権利の極限的拡大になるね。》（四）

つまり、《逆進化》とは、《人間の進化》であり、《弱者の生存権の拡張》である。そして、《副院長》が、《動物の歴史が進化の歴史だったとすれば、人間の歴史は逆進化なんだよ。》と言うように、この《逆進化》という論理が『密会』の中に取り入れられているのである。

これまで述べてきたように、『密会』の登場人物たちは、そのほとんどが《弱者》である。《溶骨症》の少女や《仮面女》などの《患者》たちはもちろん《弱者》であり、《医者》や《監視者》という《強者》によって支配されている。また、《弱者》を支配するという面においては《強者》側である《副院長》や《女秘書》も、実は、自らも病んでいる《患者》＝《弱者》なのである。

つまり、『密会』の病院社会は、《弱者》だけが存在する、《弱者の生存権》が拡張され、《弱者の権利》が極限的に拡大された社会であると考えられる。そして、《副院長》（《インポテンツ》から回復するために《馬人間》になった、《患者》＝《弱者》）は、《仮面女》（自分の身を守るために自ら人格を放棄し、《患者》となり、発情しつづける、《弱者》の中でも「最弱者」と考えられる）と、《交尾》をすることによって、《弱者の生存権の拡張》という《逆進化の究極の姿》を示そうとしたのである。

第二章「都市」の縮図としての『密会』

第一節 《弱者》の病

『密会』には、《逆進化》の論理が取り入れられており、『密会』の病院社

会に生きる人々は、そのほとんどが《弱者》であるということは、すでに述べたとおりである。ここでは、その『密会』における《弱者》たちが、現代の「都市」に生きる人々とも決して無縁ではなく、その病院社会は、まさに、現代の「都市」の縮図であるとも考えられることについて、述べることにする。『密会』に生きる、《弱者》である登場人物たちを中心に、それについて考えてみたいと思う。

まず《患者》についてであるが、《患者》が《弱者》であり、《医者》や《監視者》という《強者》によって支配されているということは、第一章第一節ですでに述べたとおりである。ここでは、《患者》とそれら《強者》たちとの間の人間関係を中心に考えてみる。《強者》としての《副院長》は、《患者》と《医者》との間の人間関係について、次のように語っている。

《怪我人を、怪我した人間としてでなく、人間の怪我として扱うことなんだな。その関係に馴れた医者は、人間面した患者を見ると、むしように腹が立つものさ。腹を立てられまいとして患者は、人間であることをやめようとする。医者はますます孤独になり、苛立ち、さらに人間から遠ざかることになる。》

つまり、《患者》は《医者》と接するとき、《人間であること》＝「人格」を放棄しようとする。したがって、《患者》と《医者》の間には、ただ「病氣」だけが存在して、「人間」としての関係が希薄であると言える。

次に、《患者》と《監視者》との間の人間関係であるが、これら両者の間は、具体的でない、抽象的な人間関係であると考えられる。《盗聴》は、本来、盗聴者が一方的に覗く（聴く）だけで、盗聴者と被盗聴者との間には、人間関係は結ばれない。しかし、『密会』においては、被盜聴者である《患者》と、盗聴者である《監視者》との間には、具体的ではないにしろ、抽象的な人間関係が結ばれていると考えられる。

《盗聴システムは、（略）存在しているというだけで畏怖され、服従心を起こさせるようである。とくに患者たちには、嗜虐的な安心感を与えるらしく、見えない盗聴マイクに向って延々と自虐的告白を続ける者から、FM発信機を体につけて私設放送局になり、排泄音を聞かせたり、嘲笑をあびせられながら人前で手淫してみせる者まで、実にさまざまだ。》

という所からも、それがうかがえるのではないだろうか。

ところで、『密会』の《患者》は、《密会》を行ったり、《密会テープ》（密通者の情事を盗聴し、録音したもの）を愛好したりする。その原因は、先に述べた《患者》の人間関係の希薄さにあると考えられる。『密会』の《患

者》は、先に述べたように、人間関係が希薄であり、抽象化されていると言える。そして《患者》は、その抽象的な人間関係の中で孤独になり、性的な衝動に駆られ、《密会》や、《密会テープ》愛好という行為に及んだと思われる。本文中の《たとえば孤独感というのは、一種の帰巢本能らしい。そして結局は皮膚感覚が、すべての感情や情緒の巣らしいよ。》という《副院長》の言葉からも、《患者》が、孤独感から性的な接触（皮膚による接触）を求めているということがうかがえる。

次に、《副院長》についてであるが、彼は、第一章第三節ですでに述べたように、《結婚したその日から、すべての会話を嘘発見器で確認しながら行うという、風変わりな取り決めをし》、そのために《人間関係神経症》という病を患い、《ひどいインポテンツにおちい》ることになる。

また、《女秘書》は《試験管ベビー》であり、《人間どうしの関係感覚とでも言うべきものが、完全に欠落してしまっ》たために、《不感症》になってしまう。

いずれにしても、彼らは、人間関係をうまく結べない存在であると言える。その結果、《副院長》は、《インポテンツ》から回復するために《馬》となり、《仮面女》との性的な接触を試みようとするし、《女秘書》は、《心身ともに理想的な結合》の期待を《男》に感じ、《男》と関係を結ぼうとするのである。

第二節 「都市」の病

そして、これら『密会』における《弱者》たちは、現代の「都市」に生きる人々とも決して無縁ではなく、この『密会』という病院社会は、まさに現代の「都市」の縮図であるとも考えられる。

『密会』の病院社会は、先に述べた《患者》の人間関係の希薄さからわかるように、人間関係が希薄な、抽象化された社会であると言える。そして《患者》たちは、抽象的な人間関係による孤独感から、《密会》を行ったり、《密会テープ》を愛好したりするのである。また、《副院長》や《女秘書》は、人間関係がうまく結べない存在であり、その結果、性的な接触を試みようとするのである。

これらのことは、そのまま、現代の「都市」における現代人の病理とも重なるのではないだろうか。

「都市」について、安部は次のように述べている。

《ただ、一つだけ、都市に固有の性格として、空間密度の圧縮ということがあげられるだろう。この集中化は、相対的に、人間の移動効率を高め、人間関係も多角化する一方、無名性も強められる。農村生活の定着性に比べると、都市生活者のパターンは、驚くほど移動民族的な傾向をおびて来るのである。》（五）

つまり、「都市」は移動性と無名性という特性をもつ空間である。したがって、「都市」はその特性から、人間関係が希薄な、抽象化された空間であると言えるのである。

そして、安部はその「都市」と、そこにおける抽象的な人間関係に、自由（平等）への可能性があると思ひ、いわば、抽象的な存在である「ぼく」を主人公に、『他人の顔』（一九六四・九 講談社刊）、『箱男』（一九七三・三 新潮社刊）という作品を書くのである。

『他人の顔』の場合は、実験中に、液体空気を爆発させたために、顔いちめんにケロイド癍痕を負った「ぼく」が、「仮面」を作製し、装着することによって抽象的な存在となり、「妻」との関係を回復しようとするが、結局は、孤独に耐えられず、それが失敗すると、最後には、痴漢的な存在となってしまう。

そして、『箱男』の場合は、ダンボールの「箱」をかぶることによって、やはり抽象的な存在となった「ぼく」が、結局は、孤独に耐えられず、一人の女性を求めることになり、それが叶わなくなると、彼女を建物の中に閉じ込めようとする。

いずれの場合も、主人公「ぼく」は、抽象的な存在であることからくる孤独に耐えられず、最後には、性犯罪者的存在となってしまうのである。

そこからは、「都市」という抽象的な人間関係を有する空間の中で、そこに生きる人々が、次第に孤独感をもつようになり、その結果、性的な衝動に駆られてしまうということや、「都市」に生きる人々が、人間関係をうまく結べないということなど、「都市」に生きる人々の病に対する安部の問題意識がうかがえる。

そして、それは『密会』においても同様である。今まで述べてきたように、『密会』の病院社会は、人間関係が希薄な、抽象化された社会であり、そのために、人々は孤独になり、性的な欲求をもつようになる。そこには、『他人の顔』『箱男』と描かれてきた「都市」に生きる人々の病に対する、安部の問題意識が込められている。『密会』の病院社会は、まさに現代の「都市」の縮図

であり、そこに生きる《弱者》たちの病は、現代の「都市」に生きる人々の病そのものである。現代の「都市」に生きる人々は、すべて何らかの形で病んでいる。だからこそ、『密会』という「病院」が舞台として設定されたのである。

第三節 《男》

ところで、『密会』は、《ノートⅠ》《ノートⅡ》《ノートⅢ》《付記》の四冊のノートによって構成されており、そのノートは、《妻》を捜す《男》によって書かれている。そして、その《男》の姿は、作者である安部の姿とも重なって見えてくる。ここでは、その《男》について見てみることにする。

《男》が、《病院》にやって来る以前に暮らしていた世間は、《あまり商売熱心でない事務系の会社の購買部などでも、健康増進器具には意外な関心を示す》ような風潮であり、《なかには「医者いらずコーナー」を特設した売場さえあるほど》の健康ブームであった。その中で、《男》は、《スバル運動具店に勤務》し、《ジャンプ・シューズ（裏底に特殊な弾性体＝気泡バネを使用した運動靴）》という健康増進器具を販売していた。

また、《男》は、《一見やせ型だが筋肉質》《特技はローラー・スケート》《以前、学生ボクシングで、選手権持ってたこともある》などの記述から、健康的なスポーツマンであることがうかがえる。その上、《男》は、《たばこ一日十本以内》と決めていることから、意識的に、健康に気を遣っているとも言える。

そのような、もともと《医者》とは無縁な、対立する立場であるとも言える健康な《男》が、突然、《妻》を救急車で連れ去られ、《妻》を捜しに、《病院》へ行くことになるのである。そして、その《病院》は、今まで述べて来たように、《弱者》だけが存在する、《弱者の権利》が極限的に拡大された社会であり、その《弱者》たちは、すべて、何らかの形で病んでいるのである。

《男》は、《金銭的な欲求》から《連日のように射精しつづけてい》る《当直医》や、《盗聴システム》を管理している、もと《コレクター（高性能のFM受信機を肩に、こぼれ電波を漁り歩いている覗き屋）》であった《警備主任》、そして、今まで述べてきた、自慰しつづける《溶骨症》の少女や、《人間関係神経症》のはてに《インポテンツ》になった《副院長》、《人間どうしの関係感覚》が欠落したために《不感症》になった《女秘書》などのさまざまな《弱者》と出会う。

そして、その《病院》が《盗聴システム》によって管理されていることや、《手淫の最中に二階から墜落して気絶した例の当直医》と《副院長》との《風変りな実験》が行われていることなど、さまざまな奇怪な場面を、まるで「地獄めぐり」のように、次々と目撃することになる。

《男》は、《妻》を捜すために《病院》の内部に入ることによって、それらのさまざまな《弱者》と出会い、奇怪な場面に遭遇し、病んだ《弱者》たちの社会を目の当たりにするのである。

《男》は《妻》を捜すために、警備室の《再生室》を開放され、《同時に何十人もの人間に分身し、じっとしたまま構内のあらゆる場所に出没し、鼻を突っ込み、覗いてまわ》ったり、《女秘書》によって殺された《警備主任》の後任として、《一方的に警備主任に任命され》、《病院中の権力を手中におさめるほんの一步手前のところまで来て》、実際に、《警備主任》としての権力を行使したりもする。そういう面では、《男》は、一度は《病院》側の人間になったかのように思われる。

しかし、《男》は、それら病んだ《弱者》たちだけが存在する、《弱者の権利》が極限的に拡大された《逆進化》の論理に基づく病院社会のすべてを拒みつけ、《副院長》が《馬》となって交接しようとしていた、《副院長》の娼婦である《溶骨症》の少女連れ出すのである。

《男》は、《関係ないよ。病気なんて、まだ風邪と麻疹くらいしかやってないんだ。》《あいにく夫婦そろって、底抜けの健康体なんだ。》と言うように、自分が健康であることを主張しつづける。そして、《副院長》の《逆進化》の究極の姿を身をもって示そうとする計画を、《まるで怪物ごっこじゃないか。》と言い、《副院長》には、

《手古摺られるね、君という人間にも。いつになったら健康の醜さを理解できるようになるんだ。動物の歴史が進化の歴史だったとすれば、人間の歴史は逆進化の歴史なんだよ。》
とまで言われてしまう。

《男》は、最後まで《副院長》の《逆進化》の論理をはじめ、病院社会のすべてを拒みつけ、決して受け入れようとはしなかった。そして、ついには、《副院長》を裏切った《溶骨症》の少女とともに、《闇の中》に葬り去られるのである。《溶骨症》の少女とともに、《闇の中》に葬られた《男》は、助けを求めるために、最後の最後に《馬》に向かって叫ぶ。

《ついに懐中電燈の電池が切れた。ぼくは盗聴器に向って、恥も外聞もなくわめき始めていた。呼び掛ける相手は馬だった。自分が病気であることを認

め、申し分のない患者になることを、あらん限りの声で訴えつづけた。》

《男》は、病院社会をあくまで認めようとはしなかった。しかし、最後には、《申し分のない患者にな》って、その弱者社会に生きるしかないと覚悟するのである。しかし、すべてが手遅れだったのである。

『密会』という病院社会は、《弱者》だけが生存できる、《弱者の権利》が極限的に拡大された、《逆進化》の社会である。したがって、自らの健康を主張しつづけ、《逆進化》の論理や、《弱者》たちの病など病院社会のすべてを受け入れようとしなかった《男》は、病院社会という《弱者》の「共同体」から排除されてしまったのである。

第四節 「都市」の可能性

そして、この《男》が、作者である安部と重なるように思えるのである。

《男》は、《副院長》の言う《逆進化》の論理や、《弱者》たちの病など、病院社会そのものを見てまわるが、最後まで、決して受け入れようとはしなかった。先に述べたように、『密会』における《弱者》たちは、現代の「都市」に生きる人々とも重なり、『密会』の病院社会は、現代の「都市」とも重なるのである。

安部は、その後期においては、「都市」とそこにおける抽象的な人間関係に、自由（平等）への可能性を模索し、作品を書きつづけてきた作家であると言える。「都市」について、安部は次のように語っている。

《とくにおびえを感じさせるのは、人間関係の変化かもしれない。都市（産業社会）は、自己の成長の能率化のために、共同体的人間関係をすっかり再編成してしまった。比喩的に言えば、隣人の組織から、他者の組織へと、編成替えをしてしまったのである。おかげで市民は、共同体的な価値の固定から解放され、おのれの価値を拡大していく、自由競争の可能性を与えられることになった。可能性にすぎないとしても、とにかく可能性は与えられたのだ。》（六）

「都市」における人間関係は、《他者の組織》である。「都市」には、非常に多くの人間がおり、人は、毎日、まったく見知らぬ多くの人々と接しながら生活している。「都市」において、人間関係は固定されておらず、それゆえ、「都市」は、人間関係が希薄であり、抽象化された空間であると言える。

（七）

それに対して、「農村」における人間関係は、《共同体的人間関係》＝《隣

人の組織》である。「農村」で生活している人々は、大抵はその土地に定着している。したがって、毎日接する人間も、よく見知った人間に限られており、人間関係は固定されている。「農村」は、「都市」に比べて、人間関係が非常に濃密であり、具体的な空間であると言える。（八）

そして、安部は、人間関係が固定されていない、抽象化された空間である「都市」に、自由（平等）への可能性があると信じ、『燃えつきた地図』（一九六七・九 新潮社刊）以降、『他人の顔』『箱男』と、「都市」と、そこにおける抽象的な人間関係に可能性を求めた作品を書きつづけるのである。しかし、そのいずれの作品からも、「都市」が自由（平等）への可能性を有しているという希望を見出すことは出来ず、その「都市」の中で、人々が孤独になり、病んでいく姿が描かれている。そして、それは『密会』においても同様であり、「都市」に生きる人々が、抽象的な人間関係の中で孤独になり、病んでいく姿ばかりが描かれているのである。

ところで、安部の発言に次のようなものがある。

《もし、（人間関係の）通路が、根源的にそれ一つ（農村的な人間関係）しかないものとすれば、これ（都市的な人間関係における病）は明らかに病理学的現象かもしれぬ。だが、もし別の通路があるとしたら、従来の観念では、とうてい通路とは認めがたいような、しかし、自覚することさえできれば、まことに有効な別の通路があるとしたら、われわれの孤独は、病気などではなく、単なる混迷、もしくは無知ということになってしまうのではあるまいか。

ニューヨークとモスクワで感じた、あの違和感も、あるいはそうした、新しい人間関係を求めながら、しかし古い通路しか知らないという、一種の過渡期における、おそれの感情ではなかったかと思うのだ。大都会の人々、それは、使用不能になった通路の前にたたずんで、孤独感にさいなまれている群衆なのである。

だが、人はそこで、孤独からのがれようとしてはならない。必要なのは、孤独からの回復ではなく、孤独を当然のものとみなして、それを進んで引き受け、未知の新たな通路を探索する精神なのであるまいか。》（ ）内、引用者。（九）

安部は、「都市」に生きる人々が《孤独感にさいなまれて》しまうのは、彼らが、《古い通路》（農村的な人間関係）しか知らないからであり、「都市」という抽象的な人間関係を有する空間における《未知の新たな通路》を発見しさえすれば、抽象的な人間関係によって人々が孤独を感じることはなくなるので

はないかと主張している。しかし、『他人の顔』『箱男』『密会』と、安部の後期の作品を読む限りでは、『未知の新たな通路』の発見はなされていない。

安部は、抽象的な人間関係を有する「都市」に、自由（平等）への可能性を模索し、作品を書きつづけてきた。しかし、「都市」に生きる人々は、未だ、農村的な、古い人間関係の概念（具体的な人間関係）から抜けきれず、都市的な、新しい人間関係（抽象的な人間関係）に孤独を感じ、病んでいく。彼らは『未知の新たな通路』を発見できず、孤独感にさいなまれている。

安部は、それらの「都市」に生きる人々の病を、『密会』の病院社会に描き、『男』の目を通して眺めるのである。『男』の最後の叫びは、安部の叫びでもある。そこからは、それらの人々の、都市的な病を受け入れることはできないが、それらの病んだ人々のいる、病んだ「都市」という空間で、自分は生きるしかないのだという安部の深い苦悩とともに、先のまったく見えない暗い絶望とがうかがえる。

『密会』という作品からは、「都市」に自由（平等）への可能性を模索しつづけてきた安部が、次第に「都市」への可能性をもてなくなり、精神的に追い詰められていた状況がうかがえる。『密会』は、「都市」に可能性を求めつづけてきた安部の「絶望の書」と言えるのである。

おわりに

『密会』の世界は『弱者』の世界であり、また、現代の「都市」でもある。そこには、「都市」に自由（平等）への可能性を模索しつづけてきた安部の、暗い絶望が見える。しかし、安部は、絶望しつつも、作品を書きつづけるのである。

安部の発言に次のようなものがある。

《いくら未来に窓を開けてみたって、希望なんかないかもしれない。絶望だけかもしれないけれど、その絶望に向かってとにかく通路を掘るということ。

それが、人間の営みというか、仕事なんじゃないかな。》（十）

《僕はなぜ書くのか何度も自問自答しました。たぶん絶望もまた希望の一形式だからでしょう。》（十一）

『密会』には、確かに、安部の絶望が感じられる。しかし、安部は、絶望しつつも、作品を書きつづけるのである。そこに、安部という作家の営みが見えてくるのではないだろうか。

注 （『安部公房全集』での収録巻について編集部で追記しました）

- （一）『魁』第一号・一九八四・六
- （二）『國文學』一九九七・八月号
- （三）「書きおろし小説『密会』を執筆中 安部公房氏」（『東京新聞』一九七七・一・三十一・夕刊）（『安部公房全集』第25巻所収）
- （四）「裏からみたユートピア」（『波』一九七七・十一月号）（『安部公房全集』第25巻所収）
- （五）「内なる辺境」（『中央公論』一九六八，十一、十二月号）。引用は、中公文庫『内なる辺境』（一九七五・七）に拠る。（『安部公房全集』第22巻所収）
- （六）「都市について」（『新潮』一九六七・一月号）。引用は、新潮社『安部公房全作品十五』（一九七三・七）に拠る。（『安部公房全集』第22巻所収）
- （七）「都市」における抽象的な人間関係について、安部は次のように語っている。《一日の中でどれだけの人間に出会うか。たとえば電車の中なんかでは、ちょっと数えきれないほどの他人といつまでも接触する。「ぜんぜん関係のない他人と、電車なら電車という機関を共同で使用する。この共同で使用するということがなければ、電車というのはだいたい産業として成り立ちませんからね。まったく見知らぬ非常に多くの人間との接触が前提になって、そこに社会を構成すべく、非常に大量な輸送機関というものも発達する。》（「変貌する社会の人間関係」（『国際交流』第二十二号。一九八〇・一）。引用は、中央公論社『都市への回路』（一九八〇・六）に拠る。）（『安部公房全集』第26巻所収）

また、次のようにも述べている。

《ニューヨークも、モスクワも、僕は風に吹かれた水の上のピンポン玉のように通り過ぎただけだが、しかし、何年、何十年住んでいようと、現在の東京の人間で、東京とピンポン玉以上の接触ができたと確信できる者が、はたしてどれだけいるだろうか。大都会の人間は、いわば永遠の旅行者のように、ほんのわずかな接点で外部の社会と接しながら、水の上のピンポン玉のように、風に流されていくしかないのである。》（「モスクワとニューヨーク」（『東京新聞』一九六四・十二・二十六、二十七・夕刊）。引用は、新潮社『安部公房全作品十五』（一九七三・七）に拠る。（『安部公房全集』第19巻所収）

(八) 「農村」における具体的な人間関係について、安部は次のように語っている。《たとえば、農村の中では一人の人間が一日に出会う人間の数というのはかなり限定されていますね。(略)日本のように農民がその土地に定着している場合、村の中で、村のだれだれがどこで何をしているか、いまこの瞬間にだれがたぶん何をしているだろう、そういうことが隅から隅まで見える。それから村の外の人があれば、それはたちどころに村中に知れ渡るといような状況ができる。》(注(七)「変貌する社会の人間関係」に拠る。)

(九) 注(七)「モスクワとニューヨーク」に拠る。

(十) 「都市への回路」(『海』一九七八・四月号)。引用は、中央公論社『都市への回路』(一九八〇・六)に拠る。(『安部公房全集』第26巻所収)

(十一) 「子午線上の綱渡り」(『リベラシオン』一九八五・三月号)。引用は、新潮文庫『死に急ぐ鯨たち』(一九九一・一)に拠る。(『安部公房全集』第28巻所収)



Rhuncus tembor ble

『飢餓同盟』 小論

wlallen

○テキストについて

本論のテキストは、新潮文庫とした。全集のテキストは初刊本（講談社）であり、十六年後に大幅に改稿されている。その間の日本共産党からの除名処分の影響も大きいと思われる。

○本論

この時期の少し前の作品は、『壁』などのシュールレアリスムの作品が多い。しかし、本作は、うって変わって、ルポルタージュ的なものになっている。記録文学への志向を強めていたのは、シュールレアリスムから、また新しい創作方法を模索していた時期だったためだろうか？「現在の会」や「記録芸術の会」のメンバーでもあった安部の1950年代の作品を語る上で、ルポルタージュ的な方法の獲得は必須なものであり、必然的であったと思われる。全集004の贗月報によると、「現在の会」副会長の真鍋呉夫は安部が「ルポルタージュという言葉」を頻用していたと思います。」と述懐している。

しかし、本作は、当時の評論家たちの間で、あまり評判がよくなかったようだ。また、安部公房自身も座談会において「失敗作」と認めている(*1)(*2)。しかし、このテーマに安部はこだわっている。前述の通り十六年後に改稿しているし、戯曲化も目論んでいた(全集017所収“狐が二匹やってきたもしくは白と黒もしくは神様になったペテン師たち”)。言い方が悪いが、田舎町で起こるドタバタ劇を描いた作品だったため評価が今一つだったのではないかと思う。しかし、私は、逆にそこにこそ本作の魅力を感じる。安部が描こうとしたテーマをもっと追求しなければならないのだと思う。また、小さな町で起こるどこか滑稽でユーモラスな騒動は、後の傑作戯曲『幽霊はここにいる』に繋がると思う。

土着的な地元民を多く登場させているため、無名性の安部の小説世界になれた読者は、かえって面食らったのかもしれない。そういう意味では、安部らしくない作品とも言える。

登場人物が多くて、しかもそれぞれ個性的だ。町長の多良根派、それに対立する藤野派、そして、彼らに対立する貝野たちの庶民のグループがある。さらに、花井太助の飢餓同盟グループが出てくる。3つのグループのいずれにも属さない第四のグループと言える。

評論家の加藤弘一氏の「食虫植物の捕虫器」(*1)では、多くの作品で、逃走していた主人公が、地元民として、よそ者の逃走を阻止する側として描いた作品として、本作を評価している。都市だけでなく、土着的なものを描くテーマにしていたのではないだろうか？

花井太助は、多良根の経営するキャラメル工場の主任として働きつつ、クーデターを目論む革命家であろうか？しかし、その具体的プランや思想を、飢餓同盟メンバーである狭山たちにもなかなか明かさない。町の有力者である、多良根派と藤野派をいがみ合わせる程度の策しか見えてこない。メンバーたちは、次第に花井に対して、不信感を抱き、最後には見限る。最後に残った森医師も、花井を精神分裂病と診断し、この物語を終える役割を果たす。

貝野の父の町議会議員補欠選挙出馬表明は、花園町を改革するための、まっとうな民主主義的な手続きだと思うが、花井は彼らのグループの活動を蔑む。そんなことをしても、この町の権力構造は変わらないと思っている。彼が求めるのは、天地をひっくり返す革命なのだと思う。そこに、かつて花井の姉里子を愛した織木が、秩父善良博士から逃れて、故郷の花園町に死に場所を求めて帰ってくる。自殺を図った織木の遺書を読み、人間メーターと化した織木を残酷にも蘇生させて、枯渇した温泉を復活させて、地熱発電所建設を目論む。ヘクザンを分析し生成して、織木に飲ませる。これこそが、花井の狙う一発逆転型のクーデターが具体化した瞬間だった。

しかし、肝心の利権は、穴鉢倉吉に騙され、多良根や藤野などの町の有力者をさらに利するものとなってしまった。花井が疲れて眠っているときに、大切な楽譜（水脈の地図を暗号化したもの）を盗撮され、彼の計画は完全に失敗する。森医師は、花井を入院させ、「まったく、現実ほど、非現実的なものはない」という言葉を残して、温泉が復活した花園町を去る。

結局、花井の一発逆転的発想は、失敗に終わる。織木によってチャンスが訪れた温泉や地熱発電所の利権を、穴鉢倉吉を通じて、町の有力者に横取りされてしまい、革命は失敗に終わる。

温泉審議会や地熱開発協力会が発足し、多良根と藤野によって、利権を奪われてしまう。秩父善良博士もメンバーの一人のようだ。一方、農民は、土地買収工作に気づかず、利権のおこぼれにあずかれなかった。

なお、町議会議員補欠選挙は、貝野が何者かに暴行を受け、藤野幸福の無投票当選だった。

○結論

そもそも、この花園町で革命を起こすことに、花井はどれだけ成算があったのだろうか？いつも抽象的な言い回しでメンバーたちを煙に巻き、織木に再会するまでは、具体的な計画がなかったように思われる。

花井の目指す革命は、一見、共産主義革命のように思われた。しかし、織木との出会いによって、電力というインフラの利権を牛耳ることことに革命の手段と目的が変容し、株式会社を結成するも、メンバーたちは次第に花井についていけなくなった。

イボ蛙が警戒していた穴鉢倉吉の接待や巧妙なやり口によって、付け入る隙を与え、花井はコロッと騙される。穴鉢が多良根の婿養子であることや穴鉢建設との関係を考慮すれば、もっと慎重な姿勢で臨むべきであったように思う。

飢餓同盟を組織し、人々の上を行ってつもりでいた花井も、結局、さらに上の人々に使い捨てられるはめになる。

共産主義革命とは縁遠そうな花園町で、やはり共産主義運動は敗北し、むしろ目立つのは、田舎町の土着文化や資本主義などであった。

○最後に

加藤氏の「花井は道化王役にすらなれずに発狂する」(*1)という指摘は、『方舟さくら丸』の主人公もぐらに通じるものがある。もぐらが内気な性格であるのに対し、花井は攻撃的な性格という対照性も興味深い。

私は、ストーリー自体も好きなのだが、個々に散りばめられた表現が特に好きだ。最後に、それらを紹介して筆を擱くことにする。

“彼は形容詞というものの数の多さにあらためて驚嘆させられた。その形容詞の数だけでも町のボスどもは窒息してしまうにちがいない。”

“今日はみんなで大人になる注射をうけに行く日だった。”

“彼は患者に飢えていた。”

“いま、花井の頭を解剖してみたら、クモの巣の網目のような迷路の中を、もう一人の小さな花井が駆けまわっているのが見られたかもしれない。”

(了)

[注・参考文献]

*1. 加藤弘一 「食虫植物の捕虫器」 <http://www.horagai.com/www/abe/kigai1.htm>

(全文が、ウェブ上で閲覧できます。)

*2. 鳥羽耕史 「運動体・安部公房」

安部公房の広場 | ciya.iwata@gmail.com | www.abekobosplace.blogspot.jp



『けものたちは故郷をめざす』と表現者 安部公房

稲垣 健

言語を使う限り、ある言語体系の内部に留まらざるをえない。体系の内部に留まる限り、体系を相対化することはできない。ところが、言語は生成する。表現は変容し、意味もズレていく。このような生成が、また言語体系を存続させていく。自己完結的なその体系はなぜ生成することが可能なのだろうか。

それは「外部」との交通があるからではないか。その「外部」は、閉じた体系「であるからこそ」、開かれる。あるいは「外部」があるから「閉じられた体系」が存続するのかもしれない。つまり、逆説的に「閉じられた体系」は「外部」を要請するのだ。

極めて分かりやすい例として、外国語（別の言語体系）との交通によって、言葉は変容していく。語彙が多様となるだけでなく、その体系を支えている「根源的部分、根源的体験部分」も体系との交通において輸血され、変容されていく。

これに耐えつつ、ひとつの言語体系は生成、存続していく。

これは多国語という言語の体系（ラング）との「交通」による新たな価値の生成の例である。

一方、「言葉」そのものの新たな価値の創出、創造という観点で見ると、やはり表現者（作家）の役割は大きい。

言語の表現者（作家）は言語体系の内に留まりつつ、表現を創造し続けている。もっともすべての作家がそうした表現者であるわけではないが。

言語の表現者（作家）は閉じられた体系の内部で言葉と格闘する。破壊し、破壊され、構成し直し、破棄し、造り直す。その反復の只中で、作品が奇跡的に形造られる。あらたな表現が立ち現れる。

これは内部において、ギリギリの極限で「外部」に迫る行為を、表現者が繰り返しているのではないだろうか。作家が「外部」を予感し、気配を察し、そ

こで新たな表現が彼に訪れるのではないか。

長い前置きだったが、『けものたちは故郷をめざす』を読みながら、作家、安部公房と言葉とのそんな戦う姿が浮かんだ。

言葉と格闘する安部公房にとって、中国大陆の地平線は、そのまま言語体系（ラング）の地平に見えたのではないか。

行けど行けど辿りつくことができない地平線。未知の、不定形な同行者と死に物狂いに奔走し、行けど行けど地平線は退き、そして、表現者を囲繞する。

とうとう「けものたち」は、海に出て、「外部」、そう、あらかじめ失われた「故郷」に向かう。

でも最後は一枚の船の鉄板の向こうに「故郷」を感じただけで、終わる。

そして、彼は「故郷なんてないんだ。結局、あの荒れ地を彷徨うだけなのか」と呟く。

「けものたち」すなわち表現者たちは、それでも「失われた故郷」をめざし続ける。

この作品のページの向こうに、血まみれ泥まみれの格闘する作家の姿が透けて見える。

僕はこの作家が、好きだ。



安部公房の愛の思想（５）

HIROSHI OKADA

これまで、佐藤正文氏の紹介になる「最後には愛しかないんだよ」という安部公房の言葉をひとつの契機として、安部公房を「愛の作家」としてとらえ直そうとする試みに挑んできた。

それらを跡づけると

創刊号 「安部公房の愛の思想一序論」・・・問題の提起・愛の思想の三つのレベル・詩「誠に愛を」・小説『デンドロカカリヤ』

第3号 「安部公房の愛の思想（２）」・・・初期の友人宛て書簡・詩・エッセイ「〈僕は今こうやって〉」・民族愛

第6号 「安部公房短編集に見る愛の思想」・・・「〈霊媒の話より〉題未定」「老村長の死」「天使」「虚妄」「鴉沼」

第7号 「安部公房の都市論—愛の思想（４）」・・・共同体・隣人と他人・他者への通路・都市の問題・新しい共同体・都市論としての『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』

このように進めてきた。

このような「安部公房の愛の思想」は、（４）で見たように、都市論を通して、「他者への通路を開く新しい共同体」思想へと高まっている。だがここに新たな問題があった。ここでいう「他者」は、都市において孤独に耐えることができ、あるいは孤独を自ら引き受けた上で、自立した精神を持つ、互いに対等な「他者」でなければならないが、「対等」である、とはどういうことであろうか。

「弱者への愛」の問題

「弱者への愛には、いつも殺意がこめられている」（*1）

これは『密会』（1977/12）のエピグラフである。この句の「弱者」の解釈には二つの立場が可能である。つまり存在論的な立場と認識論的な立場である。

存在論的には「弱者」とはたとえば「社会的弱者」すなわち社会的に不利な立場にある高齢者・障害者・児童・女性・失業者・少数民族・難民・貧困層など、というように、客観的に定義することができる見方である。このような場合、「弱

者への愛には、いつも殺意がこめられている」であろうか？そんなことはないであろう。弱者への保護、権利擁護の施策には、殺意は関係ない。

関係があるとしたら、その施策に携わる人の心の内である。すなわち認識論的には「弱者」とは「自分が弱者だと認識している相手」のことであり、この場合、自分は弱者に対する強者であることを、たとえ無自覚であっても認識していることになる。そのとき「弱者への愛」は強者としての施しであり、すでに対等ではない。それゆえ自分の思い通りにならない時や「自己愛」と対立するときには、すぐに弱者の存在を否定し、殺意へと転化するうらはらの関係にある。すなわち認識論的な「弱者への愛」には常に殺意がこめられているのである。

このような心を持ったままでは、お互いに対等な「他者」であることは出来ない。ではその道はどこにあるのか？さらに安部公房の思索をたどってみよう。

「逆進化」の思想へ

安部公房自身はこの句自体の意味についてはこう述べている。

「弱者を哀れみながらもそれを殺したいという願望。つまり弱者を排除したい、強者だけが残るということ」 (*2)

つまりこのエピグラフは強者の心の底の闇を暴き出した深い言葉だということになる。

そしてこの言葉はどんな思索から出てきたのかを探ると、『密会』についての談話記事の中で次のように言っているのに気がつく。

「この小説で考えたのは弱者の概念なんだな」 (*3)

そしてそのあとに展開されるのは、まさに安部公房の思想の高まりを示す新たな概念である。

「動物の世界なら強者が生き残って、それによって進化していく」という進化論に対して

「人間の進化はその逆なんだ。この社会のなかに弱者をどこまで包含していくかが人類の進歩につながる。ぼくはこれを逆進化の法則と言っている」

適者生存、弱肉強食が基本の「動物の進化」に対して、人間の社会は弱者の権利を守り、それを社会的に保証していくという「逆進化」の様相をとらえている。いやこれが「人間社会の進化」である、と安部公房は強調しているわけである。そしてこれこそ、社会的弱者救済や社会福祉の思想的根拠になるものであり、法則として確立したいものである。

さらに「民主主義の概念もこの法則からにじみ出てくるようなものでないといけない」と言っているのは、民主主義を政治体制や市民的権利または基本的人権の制度ととらえる一般的な考え方に対して、より深い人間社会の進化の法則について理解を求めているわけである。

こうして見ると、冒頭のエピグラフは単に気の利いたセリフではなく「強者が弱者を淘汰する」動物的進化論が人類の社会を侵していることを暴き出し、弱者を包含した社会の構築を促すべき警鐘であったと言えるだろう。

『密会』の弱者と強者

また『密会』の中での弱者と強者については、善と悪のような二元論は当然採っていない。病院を管理する立場にある強者について、女秘書は「強者でありながら弱者だという感じ」で、馬人間も「弱者になっているか強者になっているか微妙」と安部公房は言っている。（*4）強者もまた弱者である、という二面性を持つ者として描かれているのだ。我々の立場にも心の内にも強者と弱者が同居している。そのような認識に立てば、「弱者への愛には、いつも殺意がこめられている一」を、ただ単に強者からの視点によって見ることを超えられるかも知れない。主人公の男が最後には患者という弱者であることを受け入れたように。だが絶対的な弱者の側からはどうであろうか。弱者である患者、その中でも溶骨症の少女は絶対的な弱者である。少女の、強者の面はどこにあるのであろうか。

社会進化の原動力としての弱者

安部公房は、弱者と社会の関わりについて

「もしか人間が進化論的な淘汰の法則に従っている状況であきらかに弱者であったものが、社会構造を持つと別の意味での機能を持って強者に充分なりうるでしょう」（*4）

と言っている。（卑弥呼のような巫女もそうした機能を備えた弱者であった。）溶骨症の少女も、「社会構造を持つと」強者になりうる、という。

その論理は、

「自然がコントロールされ得るものになった場合（中略）自然に対する不適者こそ、自然を克服したいという願望を内的に持ち得るから、むしろ不適者生存の世界になってゆくわけだよ」（*5）

と、逆進化＝社会進化の原動力を弱者自身に認めている。発明・発見についても、弱者が自分の弱い欠落を埋めるための衝動である、と指摘している。このこ

とは、たとえば障がい者問題において「障がいは個性」という見方を超えて「障がい者（弱者）こそ社会発展の原動力」とする、とてもラディカルな考え方につながるであろう。

こうして、溶骨症の少女も、強者になりうる、それが社会進化につながる、そのことを人々が認めなければならないことになる。

自立した対等な「他者」へ

「弱者」こそ社会発展の原動力であるということを、人々が認識したとき、はじめて「殺意」は消えてなくなる。そして相互に対等な「他者」となりえて、「農村共同体」や「地域共同体」さらには「疑似共同体」などを振り捨てた、「他者への通路」が開かれ、自由な「新しい共同体」への道が開けることになる。

だが安部公房は、作品の上でそのようなユートピア的な希望を描くことはない。社会についても

「今の社会では弱者に希望はないが、その希望のなさに希望をみるよりないように思う」（*6）とも言っている。これは上に述べた「人々の認識」の道の陰しさを示している。『密会』の最後に「ぼくは明日という過去の中で、何度も確実に死につづける。やさしい一人だけの密会を抱きしめて・・・」と「死ぬ」ではなく「死につづける」というところに愛や希望の芽を見ようとしているにとどまる。安部公房の逆進化の思想が広く社会に受け入れられなければ、と痛切に思われるのである。

安部公房の「愛の思想」は、この逆進化の思想にまで高まり、それは『密会』にいたるまでの作品によって読者に投げかけられた「愛」だと考えることが出来る。

（註）

（*1）1975/1「公然の秘密」に「弱者への愛には、いつだって殺意がこめられているにきまっている。」と文中に書かれて以来、1977/6「イメージの展覧会」、1977/12「密会」のエピグラフ、に多少表現を変えて使用されている。

（*2）「都市への回路」（インタビュー）1978/4 全集26

（*3）「密会」の安部公房氏（談話記事）1977/12 全集26

（*4）「構造主義的な思考形式」（渡辺広士によるインタビュー）1978/1全集26

（*5）「都市への回路」（インタビュー）1978/4 全集26

（*6）「密会」の安部公房氏（談話記事）1977/12 全集26



私の本棚より

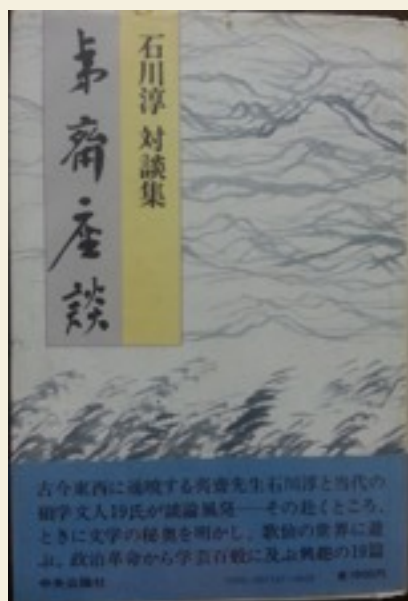


〔ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。〕

『石川淳対談集 夷齋座談』

岩田英哉

安部公房と石川淳の対談があります。わたしの持っているのは『石川淳対談集 夷齋座談』（中央公論社刊。昭和52年10月20日初版）という、石川淳の対談集です。



石川淳の対談相手を見ますと、いづれも日本文学史上に名を残すお歴々というべき作家達です。武田泰淳、川端康成、三島由紀夫、中野重治、丸谷才一、中村真一郎。批評家は、佐々木基一、花田清輝、野口武彦、萩原延寿、ドナルド・キーン。詩人は大岡信。中国文学と史学からは、吉川幸次郎、貝塚茂樹。このような人士です。

この対談の中に実に日本文学史上における安部公房の独特の位置の判る、それも如何にも安部公房らしく否定的な在り方として独自に在るその文学史上の位置の判るところがありますので、引用をします。小見出しは、「文学の土着性と自然」と題してあるところの対話です。

「安部 逆に言えば、田舎といいいますか、ローカルなものに対する興味はあまりない。

石川 だいたいね。東京に育つとなにか気持ちはあっても、すぐにつきあえないんだね。

安部 反感はありませんか。

石川 ローカルなものへの反感はないな。むしろ好奇心がある。抵抗があるとすれば、たとえば富士山みたいなものはいやだ。

安部 たとえば地方性、一般的な意味じゃなくて、日本的な意味での農本主義的な文化観がありますね。

石川 それがいやなんだ。富士山に抵抗するというのは、もっと抽象的に言えば、日本的なものがいやだということだな。

安部 そうすると、石川さんのなかにある、たとえば江戸文化的なものというのは、アンチテーゼとして出てくるわけですか。

石川 そういうこともあるかもしれない。しかし、そこと富士山との関係なんだな。」

このとき、この対談は昭和42年4月25日付けになっています。西暦で1967年。安部公房、43歳。

石川淳の江戸文化は、日本的なものへのアンチテーゼとしてあるという安部公房の理解は正しいのではないかと思います。もし富士山が日本的なものなのであれば。そうして、実際にそうであるでしょうから。富士山が嫌だというのは、安部公房にも共通の、ある感覚です。

後年、安部公房の最晩年の1991年、山口果林著『安部公房とわたし』（講談社刊）によれば、あるとき女優の読んでいた谷崎潤一郎の『吉野葛』を読んで、「谷崎って僕の文体に似ている」と感心したように言うところがあります（同書179ページ）。

谷崎潤一郎という作家は、日本的な作家というように通俗的には、また文学史の上で

も、理解されていますが、実はそうではなく、19世紀的な写実主義を否定し、この考えを根にして日本の風土に生まれた私小説の全面的な否定者であるのです。それは、この作家の『異端者の悲しみ』の最後の余白に書かれた独語を読むと実に明らかです。異端者といい余白といい独語といい、実に二人は通じているではありませんか。

さて、反写実主義という点で、石川淳も谷崎潤一郎も、安部公房の先達です。奇妙なことです、このような安部公房にとっては、ふたりとも江戸文化を知っている生粋の江戸っ子だということです。

谷崎の『吉野葛』を読んで、安部公房は自分の芸術観との親近性を直観的に読み取ったのです。

安部公房の先蹤が江戸文学（このような江戸っ子の二人を介しての）というのは、実に興味深いことです。このことは、ドナルド・キーンさんが、安部公房は実に日本的な作家だと、どこかでおっしゃっていることに通じているのではないかと思います。あなたが、この金鉾脈を探して論ずることは、また楽しいことではないかと思います。

安部公房と谷崎潤一郎の共通点というのは他にも幾つもありますが、これはまた稿を改めたいと思います。その要点を「安部公房の広場」に投稿しましたので、お読み下さると有難く存じます。：http://abekobosplace.blogspot.jp/2013/10/blog-post_7.html

それから、この対談で興味深いのは、安部公房が自分自身と阿片又は麻薬との関係語っていることです。これはシュールレアリズムのオートマチズムという自動筆記法に話が及んだときに、石川淳は麻薬を飲んで書く事を否定したあとで、安部公房曰く、

「安部 石川さんはああいうものを飲んでみたいと思いませんか。

石川 そういう気持ちはあっても、生理的には飲めないだろうね。おそらく、阿片なんか飲んだらまいっちゃうんじゃないかな。きみは飲んだことはあるか。

安部 飲んだことはないんですけども、胃痙攣をやったとき注射を打ったことはあります。」

安部公房の小説には、現実と非現実の境目を超える主人公の意識のありようを描くときの道具に麻薬や阿片が出て来ます。代表的には、前者ならば、『箱男』の贋医者であり、後者ならば、『終りし道の標べに』の主人公がそうでありましょう。その他にも、譬喩や実際の描写として、阿片や麻薬に言及している箇所が、今は例示する繁を避けますが、あちこちにあるように記憶しています。

この安部公房の答えによれば、多分自分で自分に麻薬の注射を打ったものと思われます。

この自分で自分自身に麻薬を注射するというのも、実に安部公房らしく、再帰的な (recursive) 芸術家らしいなと、わたしは思います。



質問箱

－資料など探索依頼と「回答」のページ－



【このページでは皆さまの安部公房に関するご質問を受けます。ご回答いただける方は編集部までご連絡下さい。質問には、これまで調べた範囲など書いていただくと手間が省けます。なお、回答が寄せられた分についても、継続してさらなる情報をお待ちしています。このページが読者の皆さまのよき交流の場となることを願っています。：<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>】

【質問】「空飛ぶ男」と「飛ぶ男」の関係などについて教えてください。また、「空飛ぶ男」は、教科書で読んだのと印象が違いました。（W）

【回答】まず、両者は別作品です。それぞれ、見て行きましょう。

1. 空飛ぶ男

教科書に載っているのは、雑誌『波』（初出）に掲載されたものです。その後、単行本『笑う月』（初刊）として出版されるときにラストの部分が改稿され、印象の異なるものになっています。

初刊のものは、主人公が空飛ぶ男におびえをもつことはありませんが、初出のものは、ラストで主人公が空飛ぶ男におびえて、わめくものでした。

詳しくお知りになりたいければ、安部公房全集023を読むことをお勧めします。

初出の方（＝教科書のもの）が収められていますし、「作品ノート」を読むと、両者の関係がよくわかります。

2. 飛ぶ男

未完の遺作です。安部の死後、FD（フロッピー・ディスク）から原稿が見つかり、1993年に「新潮電子ライブラリー」としてFD媒体で発売され、1994年に単行本『飛ぶ男』として発売されました。なお、単行本は、遺稿に故真知夫人が手を加えたようです。そのためか、全集には、＜スプーン曲げの少年＞（028所収）、スプーンを曲げる少年（028所収）、飛ぶ男（029所収）の3種の異稿が収められています。（編集部）

安部公房の変形能力 14 : シュールレアリズム

岩田英哉

安部公房全集第11巻の贗月報に、池田龍雄さんが次のように述べています。

「安部さんはそのころ、純粹抽象絵画の人たちとはほとんど交流がないんですよ。安部さんはシュールレアリスムに興味を持っていましたから。安部さんが、板倉賛治さんの家に間借りしていたころ、桂川寛と安部さんの家に行ったことがあるんです。桂川君がダリの画集を持って。安部さん気に入ったみたいで、『壁—S・カルマ氏の犯罪』の中の砂漠のシーンにさっそく出てくるんです……」

ここで言う「そのころ」とは、上の引用の前段に「夜の会」という名前が出て来ることから、安部公房が『牧神の笛』という、詩人から小説家になるための理論篇を書く前の時期、1950年以前の時期ということになります。この時期に既に、安部公房は、シュールレアリズムに興味を持っていたということが判ります。

そうして、その時期は、安部公房が詩人から小説家になることを考えていた時期であるでしょう。

何しろ、『リルケ』（全集第21巻、436ページ）によれば、戦時中はリルケの時間の無い純粹空間の中に冬眠をしていたところが、戦争が終り、「ぼくもこわごわ、リルケ式冬眠の穴から、這い出すことにした。そしてぼくは、いやでも発見させられてしまうのだ。時間が、流れ、たしかに存在していることを……」とあるように、時間が流れているという現実に驚き、この驚きがそのまま小説家としての、また戯曲家としての安部公房が、如何に時間を空間化するかという、これもその限りにおいては、リルケそのものの思考であるということのできる試みに挑戦させることになります。

「はじめて見る、時間の激流に眼を見張り、思わずはいた感嘆の吐息」という表現をみると、本当に驚いた安部公房の感動が伝わって参り、激流である時間という水の流れの音までが聞こえて来る様です。それほど、リルケの純粹空間の世界に惑溺し、深く沈潜していたのです。

このエッセイで、安部公房は、リルケとシュールレアリズムに言及して、次のように述べています。

「リルケはぼくに、精神の自殺術を教えてくれた。おかげでぼくの肉体を、無事、生きながらえさせることが出来たのかもしれないのだ。それに、リルケの世界は、あくまでも世界であって、文学ではなかった。ぼくに文学的な影響を与えたのは、むしろポーである。リルケはぼくに、精神の死を体験させてくれた。その、死人の眼でものを見る術から、シュールレアリズムまでは、比較的近い道のりだった。」（全集第21巻、438ページ、上段）

何故リルケからシュールレアリズムまでが「比較的近い道のり」なのでしょう

か。

それを知るために、シュールレアリズムとは、どのような思潮であったのかを見てみましょう。

岩波文庫版『シュールレアリスム宣言 溶ける魚』（アンドレ・ブルトン著。巖谷國士訳）を参照することにします。

アンドレ・ブルトンの『シュールレアリスム宣言』が理論篇とすると、その実践篇である『溶ける魚』の冒頭を見て、その思潮が如何なる思潮であるかを読み取ることになります。冒頭は、次のように始まります。

「公園はその時刻、魔法の泉の上にブロンドの両手をひろげていた。意味のない城がひとつ、地表をうろついていた。神のそば近く、その城のノートは、影法師と羽毛とアイリスをえがくデッサンのところでひらかれていた。〈若後家接吻荘〉というのが、自動車のスピードと水平の草のサスペンションとに愛撫されているその宿の屋号だった。そんなわけで前の年にはえた枝々は、光が女たちをバルコニーにいそがせるとき、ブラインドに近づいて身じろぎひとつしなかった。若いアイルランド娘は東の風の泣きごとに心みだされながら、乳房のなかで海の鳥たちが笑うのをきいていた。」

以下、このような調子の文章が延々と続きます。

これは、言葉の眼、即ち言語の観点、そして譬喩（ひゆ）の視点からみると、この思潮は、隠喩（metaphor）の文を生成する運動と解することができます。しかも、意味のある言葉と意味のある言葉を掛け合わせて隠喩を作ることによって、無意味を創造する運動、有意味の言葉を掛け合わせて言葉に無意味という意味を割り当てる運動です。

無意味とは、non-sense（正確には無意義というべき）であるということの意味しますから、non-senseということから言っても、ここからそのまま、ルイス・キャロルの世界に通じています。

そして、このnon-senseということから、シュールレアリズムの言語世界は、時間の捨象がなされていて、空間的な造詣性を有します。即ち、関係の総体として、空間的にその関係が表されているのです。それは、勿論、non-senseということから、無関係な意味の総体です。

しかも尚、執拗なことに、その思潮の根底には、美への憧憬が隠れているとわたしは思います。この美は、シュールレアリズムにおいては、時間の捨象ということから、静寂な空間の創造ということに最初から至っています。ポール・デルヴォーの静寂な絵画、ダリの運動の静止した画像を思い出して下さい。これらの絵画には時間が存在しません。絵画という芸術の形式が、そもそもそのような性格のものだとしたとしても。

さて、そのような空間では、事態が進行しません。時間が継起しない。有り得るのは、関係と関係の変化だけです。

これは、リルケの純粹空間を理解した安部公房にとっては、極く極く近しい考えであったものと思われます。

つまり、安部公房が詩人から小説家（散文家）になるためには、安部公房はシュールレアリズムに学ぶことを必要としたということです。

そうして、その時期、1949年から1951年の2年間に、幸いにも、模範となる小説、数学者ルイス・キャロルの書いた『不思議の国のアリス』に遭遇した。安部公房は、幸運な芸術家です。

〔註〕

安部ねりさんの『安部公房伝』（新潮社刊）を読むと、次のような個所があります（同書、93ページ）

「『牧神の笛』の3カ月後、1949（昭和24）年4月には初めてシュールレアリズムの手法を用いた『デンドロカカリヤ』を執筆した。（略）6月にはエッセイ『シュールレアリズム批判』で現実認識の手法としてのシュールレアリズムを説明した。その5カ月後には『壁—S・カルマ氏の犯罪』を執筆。『壁—S・カルマ氏の犯罪』は『不思議の国のアリス』に触発された幻想的な作品で、40時間ほどで一気書き上げたという。」

また、『〈『S・カルマ氏の犯罪』〉—安部公房スタジオ会員通信6』（全集第27巻、292ページ）に、安部公房自身の言葉として次の言葉があります。

「『S・カルマ氏の犯罪』は、小説に対する僕の姿勢を大きく変えてくれた作品である。構想が熟したと思ったとたん、とつぜん自由になった感じがした。ペンが踊りだし、四十時間ほど一睡もせずが一気書き上げることが出来た。その後の僕の仕事の方向を決定づけることにもなった。」

これを読みますと、安部公房は、原稿掲載までの時間差を勘定に入れると、1950年の後半から1951年の1月の時間の中のどこかで『不思議の国のアリス』に、それも『壁—S・カルマ氏の犯罪』の執筆に極く近い時間の長さのあるところ、即ち執筆開始の40時間前に出逢ったことになります。

こうして考えて参りますと、次のようになるでしょう。

リルケ→『牧神の笛』→シュールレアリスム→ルイス・キャロル→『壁』→小説家としての出発

リルケは、勿論詩の世界です。10代から20代初めまでの安部公房はこの世界の住人でした。そして、次に20代の半ば過ぎ、1950年5月に『牧神の笛』を書いて（26歳）、詩人から小説家になるために、詩作と小説作法の違いを理論的に明確にしました。

シュールレアリズムに興味を示し、小説を書くためにシュールレアリズムに惹かれ、1949年6月に、『シュールレアリスム批判』を書いてこれを理解しようとしています。

その後に、1950年（26歳）から1951年、『S・カルマ氏の犯罪』（27歳）を書く前までに、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』という、実作としての小説を書くための理想的な作品に出逢い、その作品が芥川賞を受賞する。という、このような順序になるでしょう。『牧神の笛』を書かなければ、安部公房は『不思議の国のアリス』に出逢うことはなかったでしょう。これに類することは、わたしたちの人生において、往々にしてあるものです。

安部公房が、このシュールレアリズムという思潮に何故、どのように興味を持っていたかということは、『シュールレアリスム批判』（全集第2巻、260ページ。1949年、安部公房、25歳）を読むとよくわかります。

また、この『シュールレアリスム批判』を読みますと、何故安部公房が共産主義へと急速に傾斜していったのか、その独自の理由をよく知る事ができます。これについては、後述します。

さて、『シュールレアリスム批判』の目次は、次のような目次です。最初に目次を挙げて、それぞれの中身を吟味してみましょう。

1. 現実認識
2. 非合理
3. プシコノイローゼ
4. 意識の検閲
5. 表現方法
6. デフォルマシオン
7. デモーニッシュなもの

1. 現実認識

- (1) シュールレアリズムの根幹は、『精神自動』の理論である。
- (2) シュールレアリズムは、表現の形式ではない。そう考えると、本末転倒になり、本来の動機を忘れてしまうからだ。

(3) 注意すべきは、サンボリズム（象徴主義）との区別である。シュールレアリズムとサンボリズムでは、現実の意味が異なっている。即ち、現実認識の問題を、ここで考えなければならない。

(4) シュールレアリズムの特徴は、現実認識そのものをテーマとして掲げたことである。「従ってそれは現実を否定すると同時に再構成しようとした革命理論である。」

〔註1〕

安部公房にとっての革命とは、あくまでも(4)の意味での革命であった。これは、この連載で縷々論じ、言及して来たように、安部公房独自の実存という概念に拠る革命である。従い、安部公房はマルキシズムを盲信することもなかったし、マルキシズムを盲信する通俗的なマルキストでは、ましてや、全くなかったということがわかる。〔註2〕を参照下さい。

(5) (4) のことから、現実の表現方法については、更に考えは、次のふたつに分かれる。

- ① ひとつは、現実の非合理面を合理的に表現しようとする立場であり、
- ② もうひとつは、その表現をも非合理的に捉えようとする立場である。

2. 非合理

(1) 非合理についても様々な解釈がある。

(2) それらの解釈もみな、「表現方法として、あるいは手段として選んだ共通点、原始芸術・狂人の作品等との近似性から、それらすべての非合理の用法が一つの必然性として説明されてくるのである。」

(3) (2) のことを、「精神構造の分析によって説明してみたい。」

(4) 「さて、ここで想起されるのは、先ずダリのパラノイア的批判活動であろう。パラノイアとは字義のごとく寄生的理性を意味し、一個の病というよりはクレランボウによって纏められた精神自動性症候群と考えらるべきである。すなわち精神現象でありながら意志の統制を受けず、あたかも寄生虫のごとく精神の中に巣喰う自動精神である。それは意識の検閲をすり抜けて種々の妄想を形成する。」

(5) 「シュールレアリスト達は正に直観的にその（筆者註：(4)の）必然性を感得したのであった。」

(6) (5) において、「アンドレ・ブルトン」は深層心理による思考のプロセス即ち精神自動現象を、ダリはパラノイア即ち非合理的思考の合理化のプロセスを方法

として取上げられたのだという点に於いて極めて客観的な態度であったことに注意しなければならない。その客観性に於いてシュールレアリスト全部を狂人の群れと考えるわけにはいかぬとすれば、当然フロイドによって展開されたプシコノイローゼ（精神神経症）がそうした問題の中から浮かび上がってくるのではなかろうか。」

3. プシコノイローゼ

（1）「これは大別してヒステリーと神経質とに分類される症候群であり、疾患というよりは三浦岱栄博士の主張のごとく、まさに《一個の世界》であると考えられ、更にすべての人間に現れうる外界刺戟に対する一反応現象である。（略）すなわち、刺戟と表出運動との関連を表出の量よりも質に於いてとらえ、そこから異常精神現象が発現する機構をさぐりあてようという考えである。（略）その及ぼした社会的影響の大きさは説明するまでもないだろう。今では精神作用の構造を《意識—無意識》の図式によって説明するのは一応の常識である。意識と、絶えずその監視検閲を受けている無意識との矛盾、内的軋轢がプシコノイローゼだと考えられる訳である。」

（2）この後、パブロフの学説と用語を使って、同じ事を大脳生理学的に説明をしている。パブロフの言う皮質第一系は、無意識の世界に、第二系は、その抽象化の作用から意識の世界に対応するものだ。

4. 意識の検閲

（1）意識は、絶えず無意識界の作用を検閲している。

（2）意識は、「その表出された質が無害であるときにだけ表出を許すが、さもない場合はそれを変質あるいは抑圧しようとする。」

（3）パブロフの第二系（抽象化の作用）と共に、社会が成立した。

（4）「大多数の人間（民衆）」が、この第二系による社会的、合理的な関係の維持に対して「抵抗（内的軋轢）」を覚え、「その抵抗を共通の社会的現実として受け取らざるを得ない時があった。」「抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺戟を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない。」

（5）「むろん深層作用そのものは極めて個人的・非社会的であるにしても、反社会的であるわけではなく、上層作用（意識作用）とのバランスに於いて充分社会の中に安定しうる筈のものである。事実すべてのプシコノイローゼは刺戟から脱し、バランスを取戻せば直ちに異常反応を中止する。」

（6）このように、「シュールレアリストはただ単に深層作用を主張したのではな

い。無意識作用の負担を超えた無意識界への刺戟を主張したのである。ユートピアが到来せぬ限り、シュールレアリストの主張は永遠に正しい。」

5. 表現方法

(1) しかし、「意識の検閲」で述べたような「その無意識の自己主張が如何にして芸術的表現となるのか？」

(2) 「シュールレアリズム初期に於けるブルトンの興味ある宣言文の一部を引用してみよう。《この二つの現実（筆者註：意識と無意識のこと）は、現在の社会状態に於いては互いに矛盾し、そしてこの矛盾に於いて吾々は人間の不幸やその運動の原因を見るのだが……。吾々はこのふたつの現実を互いに対決させる仕事をあらゆる可能な機会に於いて行わなければならない。どちらか一つを他に卓越させてはならず、また一つに対して、あるいはまた他に対して、二つが同時に働くことは不可である。何故かといえば、それらが現在あるより、より少なく離れてあることになる」と推定されるからだ。》」

〔註2〕

ここに於いて、わたしたちは、安部公房が20歳で書いた詩人という典型としての人間のあり方について書いた論文『詩と詩人（意識と無意識）』の考えが、シュールレアリズムに於いて、展開されていることに気付く。従い、シュールレアリズムを考えるときにも重要なことは、安部公房がこの論文で論じた、安部公房独自の実存の思想なのである。それは既に、〔註1〕に書いたように、10代から20代前半までの安部公房の哲学用語で言えば、リルケに学んで独自に概念化して名前を与えた存在象徴という考え、即ち現実を一度忘却して、無意識の世界から意識の世界に経験の事実が形象（イメージ）として実在の姿をとって現れるまで待つて、それらの形象（イメージ）として現実を再構成するという考えに他ならない。勿論この方法は、生涯を通じての、唯一の安部公房の創作の原理でありました。（このリルケに学んだ安部公房の創作方法論は、そのまま最初の小説『終りし道の標べに』の主題となっており、それによって眼前する形象（イメージ）を存在象徴という名前と呼んでおり、そうして、この作品は、実際にその方法によって書かれた散文となっています。）

安部公房の言う独自の実存の概念については、中埜肇宛書簡第10信（全集第1巻、269ページから270ページ）に書かれています。この、一生涯を通じて維持した実存の考えが、真知子夫人と結婚したことを報告する文面の中で言われていることは、誠に興味深いことです。この文面を読めば、何故山口果林という女優を愛したのか、しかも『箱男』を書いている契機（タイミング）で、という理由も明らかになるとわたしは思います。御興味のある方は、この手紙を是非お読み下さい。安部公房をより深く理解するために。

また、『錨なき方舟の時代』でのインタビューに答えて、安部公房は、自分自身の実存についての考え方を述べています（第27巻、167ページ、下段。1984年、安部公房、60歳）。これによれば、実存とは、「実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というのは一つの規定概念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方、それがなぜぼくにとってそれほど重要な思想だったかという、やはり戦争中だったからだと思う。」と述べています。

「未分化の実存」とは、名付けられない状態、無名の状態、社会的に機能化されていない（父、母、裁判官、警察官、乞食—『箱男』は乞食ですら在りません—等々と呼ばれていない）状態、生（なま）の、剥き出しの状態のことです。

（3）「これから結論されるのは、やはり無意識を表現するには無意識を以て表現する以外にはないということである」。

（4）「シュールリアリストが直観していたデモニッシュなものは、単なる深層作用の露呈なのではな」い。「深層作用がかくも問題になった理由は、プシコノイローゼ的現実が社会的現実になったためである」。

（5）「それにしても、それを具体的に表現方法とするにはどうすればよいのか？破壊が常にそれ自体創造の要素であったとすれば……破壊による他はない。徹底した破壊以外にはないのだ。だが如何にすれば徹底した破壊がなされうるか？言うまでもなくそれは徹底した論理的な追求以外にはないであろう。」

[註3]

この（5）の言葉を読むと、これは全く安部公房らしいものです。破壊が論理的追求以外にはないとは。従い、安部公房がマルクスによる共産主義の政治活動に入っていくときにも、最初から通俗的な組織論理とは正面から衝突していたということを、この一文は意味しています。既にこのとき、共産党からの除名の種が蒔かれていたというべきです。

（6）「その論理的追求には存在論的追求と科学的追求とがある」。

[註4]

存在論的追求とは、安部公房独自の実存の考え方による追求であり、科学的追求とは、仮説を設定して考えを追求することです。

6. デフォルマシオン

（1）「どんなイマージュもすべて肉体的な表出運動と独立ではない」。

（２）意識と無意識の「内的軋轢は必然的にデフォルマションを行う。（略）内的軋轢の激しさがデフォルマションの価値を定めるものであって、それ以外にデフォルマションの規則などあり得ない。従って、ここにパヴロフの第二系としての《抽象》が問題になってくる。」

（３）ここに至るとどうしても、人間の抽象作用ということから、アブストラクト・アートとシュールレアリズムの関係を論じなければならないが、紙面の都合でその余裕がないので簡潔にまとめると、前者と後者は対立するものではなく、論理的な追求をすれば、それらが「結局同じ衝動の裏と表であるということが証明」されることがわかる。

（４）「われわれは非合理を深層作用であるパヴロフの第一系、合理を抽象能力である第二系という言葉によって置替えねばならぬ。そして内的軋轢を耐えながら詐病によって放散させず芸術まで高める（昇華させる）ことによって創造の契機としなければならない。しかしこれはすべて論理的追求であることによって破壊的であり、合理的であり、真の非合理はシュールレアリズムかアブストラクト・アートかというところにあるのではなく、創造自体の問題に及んで始めて出てくるものである」。

7. デモーニッシュなもの

（１）「デモーニッシュな形態とは、それ自身の根柢に形態を破壊する働きをもったものであり、事物の存在根柢であり、実存の形式である。芸術は実存の直接的表現を目指すものである以上、芸術はデモーニッシュなものであり、創造と破壊、精神的なものと動物的なものという二重の弁証法を持っていなければならない。これは正にシュールレアリズムが為さんとしたところではなかったか。思うにそれは永遠に語り出すことのない神話ではないだろうか。」

〔註５〕

シュールレアリズムは、「永遠に語り出すことのない神話ではないだろうか」という言葉は、安部公房の小説観を自ら言い当てている。安部公房のどの作品も、小説であれ戯曲であれ、永遠に生まれることのない胎生の世界の物語であった。『名もなき夜のために』

（全集第１巻、５５３ページ、下段）では、この同じ考えと感覚を、「負数の時間を歩むことは丁度人間が胎児のあいだに生物の全歴史を繰返すように、すべての人に繰返される物への復帰の道だと考えてみたらどうだろう。」と書いている。１９４８年、安部公房、２４歳。こうして見ると、やはり、安部公房のシュールレアリズムの理解には、リルケの純粹空間の思想と感覚が深く宿っている。詩人の時代の安部公房とは異なり、破壊ということが新しいことであるが（これが「はじめて見る、時間の激流に眼を見張り、思わずはいた感嘆の吐息」を吐いた安部公房にとっての戦後の意義と意味であろう）、しかし破壊

の後に新しく物事を創造しようとする、同じ思想と感覚から出発するということになること、これが、誠に安部公房らしい。

〔註6〕

この「デモーニッシュなもの」を読むと、共産主義もまた、安部公房にとっては最初から乗り越えらるべきものであったということがわかります。何故なら、「デモーニッシュな形態とは、それ自身の根底に形態を破壊する働きをもったものであり、事物の存在根拠であり、実存の形式である」という考えによってです。あくまでも、安部公房の方法論（Methodology）は、リルケに学んで自家薬籠中のものとした自分独自の实存の上に立って、「現実を否定すると同時に再構成する」（「現実認識」）ことなのです。〔註2〕を参照下さい。

（2）「今では社会的現実である内的軋轢のデーモンに身を委ねた以上、論理的な追求の手を一寸でもゆるめるや、われわれはたちまち錯乱的な渦動状態か擬死態発作の奈落に落ち沈んでしまうよりほかないのである。」

（3）「以上総論的にシュールレアリズムの本質について述べたつもりであるが、読み返してみると、とてもまだ十分に言いつくしていない。色彩と形態の問題、シュールとアブストラクトの絵画史的な関連、リアリズムの問題、空間感覚と時間感覚と形態のつながり、特に色彩の問題に触れ得なかったことはすこぶる残念であるが、これはまた各論的に具体的な作品について論ずる機会にでも併せて取上げたいと思う。」

〔註7〕

色彩の問題を論じていたら、きっと緑色とシュールレアリズムの関係を論じていたことでしょう。

さて、こうして、この『シュールレアリズム批判』を読みますと、何故安部公房が共産主義へと急速に傾斜していったのか、その独自の理由をよく知る事ができましたので、纏めてみたいと思います。

『シュールレアリズム批判』での、アンドレ・ブルトンの宣言文の引用をみますと（第2巻、263ページ。下段）、上記の註釈にも縷々言及しましたが、安部公房は、意識と無意識の抑圧・被抑圧の関係を、社会一般に及ぼして考えたということです。ここから、共産主義まであと一歩です。

〔註8〕

また、『シュールレアリズム批判』よりもう少し後になって、『僕の小説の方法』というエッセイを、安部公房は書いています（第3巻、180ページ、上段。1952年、安部公房、28歳）。そこにある、シュールレアリズムとは「これはひとつには、明らかに社会に対するレジスタンス、すなわち反ブルジョア文化のデモンストレーションであった。」とある一文のその用語とその使い方を、『シュールレアリズム批判』と併せて、読んでみれば、シュールレアリズムから共産主義までは非常に近く、繋がっていることがわかります。その独自の繋がり方は、何度も繰返しますが、安部公房独自の、10代で既に至っていた実存の概念に基づいているのです。

また、この『僕の小説の方法』というエッセイは、やはり19世紀の自然主義文学への批判として書かれていますので、シュールレアリズムは、安部公房にとっては、仮説設定の文学（ポーの座標軸）のための理論であったということがわかります。

さて、このように考えて来ますと、安部公房は、共産主義をシュールレアリズムによって、最初から克服しようとしたということになります。（こうしてみると、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』に逢着したということは、安部公房の芸術家の人生において、誠に僥倖でありました。）

それには裏づけがあって、10代からの哲学談義をした成城高校の親しき友、中埜肇宛の次の言葉を読めば、明らかです（第2巻、333ページ、上段から下段へ）。1950年、安部公房、26歳。『S・カルマ氏の犯罪』まであと一年。

「ぼくは次第にマルクシズムに接近してゐます。マルクシズムはぼくのアンチテーゼではなく、ぼくの越えるべきものとしてあるやうに思はれます。革命と超越のイデーがぼくの中で結ばれかかつてゐます。神格化された”社会”、現代のデメーテルの克フク！」

安部公房のいう革命がどのような革命であったかは、上で見た通りです。そして、「意識の検閲」を受けて成り立っている社会に対してどのように、それを超克しようとして、この革命と結びつけたかも、上で見た通りです。

この『シュールレアリズム批判』は、中埜肇宛の書簡の解説になっており、中埜肇宛の書簡は、『シュールレアリズム批判』がどのようなところで書かれたかを明かしております。

さて、こうしてみると、前回論じたルイス・キャロルと今回論じたシュールレアリズムを併せて考えると、安部公房の、小説家としての出立は、次の様に描くことができるでしょう。

リルケ→『牧神の笛』→シュールレアリスム→ルイス・キャロル→『壁』→小説家としての出発
-----→マルキシズムという共産主義-----→

シュールレアリスムとマルキシズムの関係は、シュールレアリスムは、マルキシズムという共産主義を超えるための最初からの手段、マルキシズムは超克すべき目的（対象）という関係です。

安部公房のシュールレアリスム論を読むことが、思いもかけず、そのまま何故安部公房が共産主義に急速に傾斜していったかの理由を知ることになりました。

こうして、どこまでも首尾一貫した安部公房の生き方を、またもや、わたしたちは知る事ができたということになります。

〔余白〕

また蛇足ながら、アンドレ・ブルトンの『シュールレアリスム宣言』に、「贗小説を書くには」（原文は傍点）と題した一章があります。ここに書かれているアンドレ・ブルトンによる贗小説の書き方は、諸処での安部公房の発言を参照して知ると、確かに安部公房の小説の書き方の、安部公房のための、アンドレ・ブルトン流の説明になっております。

「あなたがだれであろうと、もしもその気がおこったら、月桂樹の葉をいくらか燃やして、そのかぼそい火をたやすまいなどとは思わずに、さっそく小説を書き始めるがよいだろう。すなわち、「晴天つづき」の針を、「始動」のところにあわせさえすれば、ゲームが始まるだろう。ほら、ここに、ずいぶんちぐはぐな動作をする登場人物たちがあらわれる。彼等の名前は、あなたの書くもののなかでは大文字の問題にすぎず、ちょうど非人称の代名詞ilがpleut（雨がふる）、ya（……がある）、faut（……ねばならぬ）などといった語に対するばあいとおなじ気やすさで、能動詞たちに対してふるまうだろう。それらがいわば能動詞たちを指揮して、観察とか、反省とか、普遍化能力とかいったものがあなたにとってはまるで助けにならなくなるような場所で、あなたの思いつきもしなかった数々の意図を、だが、あなたのものとして通してくれるだろうことを確信したまえ。そんなふうにして、

ごくわずかな肉体的・精神的な特徴をあたえられ、じっさいにはほとんどあなたのおかげをこうむっていないこの人物たちは、あなたの関知するまでもない一定の行動の指針を、もはやすてることがなくなるだろう。その結果、見た目には多かれ少なかれ手のこんだひとつの筋だてが生まれ、心をゆさぶるにせよ、ほっとさせるにせよ、あなた自身にとってはどうでもいい結末へと、一步一步、つじつまをあわせてゆくことだろう。あなたの贋小説は不可思議なまでにほんものの小説とそっくりになるだろう。あなたは金持ちになり、衆目の一致するところ、「腹に一物」ある人物として認められるだろう。なにしろこの一物とやらは、まさしく、あなたの腹のなかにおさまっているからである。

もちろん、これとおなじやりかたで、しかも自分が何を説明しているのかわからないという条件をまもりさえすれば、あなたは贋評論にとりくんでも成功することができるだろう。」

〔註9〕

安部公房がどのような考えで共産主義に急激に傾斜していったかをよく知ることのできる詩があります。それは、『宣言』と題された詩で、感嘆符の8つもある、およそ詩とは呼び難い、何か政治的な煽動的なビラにでも載せるのが相応しい詩です。（全集第2巻、228—229ページ。1949年、安部公房、25歳）

しかし、この詩は、安部公房がそれまでのリルケの詩の世界での巣ごもりから目覚めて、外界を見た時に音を立てて流れている時間を発見した驚きが、そうして初めて社会に出て生きている人間達にあった驚きが、そのままこのような言葉になって出ております。そのことは、「人間の胎生期は終ろうとしている」という言葉に読み取ることができるでしょう。小説家になるために、リルケの『マルテの手記』を一度自分で書かなければならないと思って書いた筈の「名もなき夜のために」に出て来る（全集第1巻、553ページ、下段）「負数の時間を歩むことは丁度人間が胎児のあいだに生物の全歴史を繰返すように、すべての人に繰返される物への復帰の道だと考えてみたらどうだろう。」と書いている考えを、この詩で否定をしたということになります。そうして、死者ではなく、生者として時間の中を生きて行こうと決心をしたということがわかります。このとき、安部公房は同時に、観念的なそれまでの死ではなく、安部公房という名前の付いた自分自身の具体的な死について考え始めたということになります。

この詩は、詩として余りに無残で、詩としてはとても読むに堪えないものですが、他方、純粹無垢な青年詩人が、これから社会の中で小説家として立って行こうと苦闘していた時期に、やはり書かざるを得なかった言葉であるのです。言葉の眼から観ると、若者が社会

に対するとき誰もが犯す過ちを、青年安部公房も犯したということです。或いは、見かけ上犯してしまったということです。安部公房の深層心理、リルケの純粹空間への憧憬を裏切って。

〔註 9 への註〕

安部公房は、1973年の『箱男』から、社会の中にいることから大きく旋回をして、表立って、リルケの純粹空間に回帰し、帰還するというのが、わたくしの仮説です。『箱男』、『密会』、『方舟さくら丸』、『カンガルー・ノート』、『さまざまな父』、『飛ぶ男』が、その円弧の上に整然と並んでいます。『箱男』執筆時に、女優山口果林に遭ったということは、芸術家としての安部公房の人生に深い意義と意味を有していたのだと、わたしは思います。何故そうなのかについては、稿を改めて論じたいと思います。

そして、やはりこの詩であってさえ、このような安部公房を救っているのは、最後の6行に出て来る窓という、安部公房が独自に、10代の詩の世界で概念化した言葉です。（安部公房の窓については、『もぐら感覚5：窓』で詳細に論じましたので、それをご覧ください。）ここでも、やはり詩が安部公房を救っております。

「宣言

君たちはマテリアリストの何を恐れるのか！
マテリアリストが君たちの何を傷つけたというのか！
古い物質は亡び 原子の時代
物質は戈をおさめぼくらの中に還ってきた！
物質ははや人間を責めはしないし
人間は物質を恥ぢることを止めねばならぬ
自由と必然を創造の場に止揚し
ぼくらは歴史の死に耐えよう！
歴史は死にながらも
ぼくらを産み出す陣痛にもだえているのだ
人間の胎生期は終ろうとしている
ゼロから始まった歴史は再びゼロに還ろうとしている

（略）

胎外への寒冷と夜への準備をおえた今
 愛情ふかく
 歴史の死を手つだつてやろうではないか！
 母なる神話を締殺さうではないか！
 父なる実存を創造のギロチンに追いやろうではないか！
 新しい「世紀」の風を
 ぼくらは送る
 工場の窓
 オフィスの窓
 病院の窓
 街の窓
 そして行方不明になった
 わが同胞（はらから）の心の窓へ」

安部公房は後年、この共産党員であった時代（安部公房は1951年に共産党に入党し、1961年に除名されるまでの10年間、共産党員だった）を振り返って、「熱病のようなものだった」と言っております（全集第30巻、626ページ）。これは、その通りの率直な言葉だと思います。

（全集第2巻の『贗月報』で中田耕治は、次のように証言しています。

「宮本治が入ってきてから「世紀の会」は変質していきました。左傾化していったんです。宮本はすごく頭がよかった。そのころの会員には、針生一郎、瀬木慎一、柁木恭介がいました。

花田さんが「総合文化」をやっていたんですけど、その対談で安部さんが「僕は共産党の作家じゃない」と、語気鋭く言ったのが印象的でした。その後、急速に左傾していったので驚いていました。」

Wikipedia (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%89%E9%83%A8%E5%85%AC%E6%88%BF>)によれば、「1950年（昭和25年）には、勅使河原宏や瀬木慎一らと共に「世紀の会」を結成」とあります。）

この「熱病のようなものだった」という言葉は、何について言われた言葉かと言えば、上で論じたように、20歳の時に著した『詩と詩人（意識と無意識）』という論文で確立した安部公房独自の実存の場所にある意識と無意識の関係を、言わば拡張して、社会的な抑圧と被抑圧の関係の類比（analogy）で考えることについての熱病だったということなのです。

プラトンが『国家』という著作のある箇所で、国家を論じながら譬喩（ひゆ）を使ってソクラテスはその本質を解明し、他の話者達を開明して行く所で、何故こんなに国家を人体に類比して論ずる事が素晴らしく、ぴったりとして径庭がないのかと、驚きの言葉を書いている箇所があります。

確かに国家の場合には、人体の譬喩と類比は、その本質を思考するのに過つことなく役立つのです。しかし、安部公房のこの意識・無意識と社会の抑圧・被抑圧の譬喩と類比、そのような実存と社会の関係の類比は、果たしてぴったりと来る譬喩であり類比であり、役に立ったのでしょうか。わたしの答えは、全く否、です。それ故に、上記において、わたしは、安部公房もまた平凡なる若者が犯すのと同じ過ちを犯したと書いたのです。

安部公房の実存に類比すべきは、神話だったのです。そして、その後の文学的な進展を見れば、その通りになっております。即ち、実存は神話に類比できるし、神話は実存に類比的に思考することができる。但し、その思考者が、実存を中心に物を考えて、第2の現実を創造しようとする限り。勿論、この場合の実存とは、10代の安部公房がその慧眼で見抜いたその人間の未分化の状態であり、人間が社会的にも性的にも分化しない以前の、生（なま）の、原質の、原型の、柔らかな、皮を剥いだ果肉のような、社会からは乞食以下の存在だと思われる程に無役であり、従い無能であり、無名であり、無知であるその状態に留まることを意味しています。そう、その状態に留まる限り、作者は実存と神話を類比的に考えることができるのです。

そうであればこそ、「熱病のようなもの」から覚（さ）めた安部公房は、本来の言語芸術の世界に向かって行き、神話の、即ち物語の構造を備えた、言語による小説（一個の宇宙の創造、典型としての人間の創造、第2の現実の創造）を創造する事に集中して行った事は、当然の成り行きであることが理解されるでしょう。その「熱病のようなもの」から覚（さ）めて書いた小説が、1962年の『砂の女』であることは、言うまでもありません。

10代からの哲学談義をした成城高校の親しき友、中埜肇宛の書簡で共産主義（マルキシズム）を超える志を伝えてから、これを超えるのに、安部公房の大才を以てしても、シュールレアリスティックな『S・カルマ氏の犯罪』を書いてから、10年の時間を要したということです。とすると、次の様な図を更に描くことが出来るでしょう。

1949年
 リルケ→シュールレアリスム→『牧神の笛』-----ルイス・キャロル→『壁』→小説家としての出発-----『砂の女』
 共産主義（マルキシズム）への接近-----『世紀』の創刊-----（共産黨員としての10年間）-----

[註9への註への註]

全集の第2巻の目次と第30巻の索引とでは、『牧神の笛』の発表年月日が異なってお

り、前者は1949年1月4日、後者は1950年5月5日となっています。前回の「安部公房の変形能力13：ルイス・キャロル」とこの論考では、前者を採りました。岡田裕志さんによれば「牧神の笛」が後者、即ち30巻索引で500505となっているのは『野生』11号に掲載された日とのことです。

安部公房と共産主義（マルキシズム）については、稿を改めて論じることがあるかも知れません。

今回は、安部公房と安部ヨリミを論じます。



投稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの投稿をお待ちしています。

どうぞ、安部公房の作品を読んで、どんな感想、どんな印象、どんな一行でも構いません。

ご投稿戴ければ、ありがたく存じます。

あなたのどんな言葉も、安部公房という人間を考え、その作品を読むことにつながり、わたしたちの人生の意義を深めることでしょう。

編集部一同、ここからお待ちしております。

もぐら感覚 17 : 笛

タ克蘭ケ

1。白樺と笛

『無名詩集』に「孤独より」と題する詩があり、11篇の詩から構成されていますが、その「其の四」に次の詩があります（全集第1巻、231ページ）。1947年、安部公房、23歳。

「白樺の枝二つ三つ
手折りて童（わらべ）
笛を作りぬ

遥かなる想ひの如く
しのびよる夕と風に
その心 重かりき

その故か その心
あまた憧れの音（ね）にみちたれど
風よりもなほ微かにて」

ここにあるのは、白樺の枝を手折って笛を作ることが歌われています。しかし、その笛を吹くということは歌われておりません。その笛の吹かれざる音は、この話者の心の内に憧れとして微かに鳴っていると歌われています。

この詩の白樺とはどのような形象（イメージ）なのでしょう。それを見てみましょう。

『没我の地平』に「謎」と題した詩があります（全集第1巻、179－180ページ）。1946年、安部公房、22歳です。

「自然に四季がある事を
僕等はどの手で受け取ろう

(略)

ほっそりとした白樺の秘密
どこかの森で湖が
僕に歌って聞かせてくれた
雪と命の不思議な謎を

あの白樺の物語り
か弱い永遠（とは）のとらわれの身を
悦びの故僕等の内に
読み取る事が許されようか
さすらって行く此の身の上に
置き代へても良いものか

おゝ例へ
それを僕等が耐えたとしても
郷愁に乱れた心は何処へ行く
心の四季はあの白樺を
枯らさぬ事が出来るかどうか
……………」

これを読むと白樺という木には秘密があり、「白樺の秘密」とは、四季の移ろいという時間のありかた、即ち自然の循環について、この一人称（僕）が「どこかの森」の中で、「湖が/僕に歌って聞かせてくれた」、そのように湖によって歌われた、即ち湖が詩としてこの詩の一人称に伝えられた、白樺についての秘密だということがわかります。

そして、この白樺は「ほっそりとした白樺」です。この形象（イメージ）は、『詩と詩人（意識と無意識）』の芦笛に通じています（全集第1巻、107ページ。1944年、安部公房、20歳）。

さて、この白樺は、「か弱い永遠（とは）のとらはれの身」とあるので、どうやら囚人のように囚われの身となっているようです。このことを巡る物語が、「あの白樺の物語」なのでしょう。そして、それは、「雪と命の不思議な

謎」の物語であるのです。

この白樺の身の上を、わたしたちのこころの内に、同様に読み取ろうとすると、それは、「悦びの故」ではそうすることは適わないとあるので、そうであれば、反対に悲しみを以て、読み取ることになるでしょう。それは、やはり悲しみの感情を伴う物語です。

何故そうかと言え、それは、この地上にある「此の身の上」が「さすらつて行く」身の上であるからであり、そのように移り変わって行く人間にとっては、白樺の物語は、手の届かない、やはり悲しみの感情を以て理解をする以外にはない物語だからだということになります。

何故ならば、白樺の物語とは、自然の四季の中に生きる人間とは異なり、永遠に閉じ込められて、変わる事のない、不死のこの樹木の物語だからです。

それ故に、この詩の第1連は、そのような白樺の物語に言及する前段として、

「自然に四季がある事を」

と歌い始めるのです。

さて、そうしてみると、『天使』の末尾に出て来る白樺の小枝を手折って製作した笛は、この世の音を鳴らす笛ではなく、永遠の中に閉じ込められていつまでも変わらぬ姿でいる白樺の「雪と命の不思議な謎」を歌い出す笛だということになります。『天使』の末尾に措かれた詩は、次のようになっています。1936年、安部公房、22歳。

「白樺の二つ三つ

手折りて童 笛を作りぬ

遥かなる想いに答え

時に咲く紅の花 いざ咲けと

唇は笛を求めど

風よりも尚おひそかにて

笛は鳴らざる……」

上に引いた『謎』で歌われる雪は冬という季節を示し、命とは春に訪れる生命を示しているでしょう。従い、この白樺の物語は、死と生の物語だと言い換えることができます。

白樺の物語は、永遠の中に閉じ込められた生と死の物語だということが、わかりました。

〔註〕

こうしてみると、胎生の中で生ということが思い出されます。この笛と同じ発想が、『名もなき夜のために』にあります。次の個所です（全集第1巻、553ページ下段）

「どんな傷からでも、生と死を含めた全存在の傷が成長するのに気づくはずだ。これが貧しい僕にはせい一杯の贈物であるらしい。

そしてもしそれが役立つものだとすれば、負数の時間を歩むことは丁度人間が胎児のあいだに生物の全歴史を繰返すように、すべての人に繰返される物への復帰の道だと考えてみたらどうだろう。」

してみると、後述する『詩と詩人（意識と無意識）』の芦笛も同じ形象（イメージ）であると断定してもよいでしょう。

また、『没我の地平』に『光と影』という詩があります（全集第1巻、187ページ）。このページにある次の詩句も、上の解釈によって、その意味が明らかになります。その最後の連を引きます。1946年、安部公房、22歳。

「しかし見詰めよ生身と共に
牧場にこもる静寂を
例へば沈む白樺の森
そこに近付く移ふ生身が
盃たるを耐える為には
おゝ姿見よ お前自身は
白樺であつてはならぬのだ
大地の暗さを微笑む事を
牧場に消してはならぬのだ。」

「例えば沈む白樺の森」。これは、湖に沈んでいる白樺という形象です。ということは、白樺は、死んでおり、死の世界にあるということになります。

そうしてみると、

「そこに近づく移ふ生身が
盃たるを耐える為には
おお姿見よお前自身は
白樺であつてはならないのだ」

と歌う論理がよく解ります。

姿見とは、この詩のその前の連で歌われている「無名の吾」のことの、言い換えであり、その「無名の吾」が姿見となり、一個の盃となって、この世を生きるということを歌っていることが解ります。

[註]

「無名の吾」という言葉のある前の連は、次のようなものです。

「おゝ姿見よ 今一度
あの放牧を歌う為
無名の吾をうつし出せ」

そうしてみれば、『謎』という詩の最後に今一度戻って考えると、

「おお例え
それを僕らが耐えたとしても
郷愁に乱れた心は何処へ行く
心の四季はあの白樺を
枯らさぬ事ができるかどうか
……………」

とある詩行の意味は、移ろい生けるものとしてあるこの「僕らが」この白樺の

物語、即ち死としてあるが如くの、永遠の中の不死のその謎に耐えて、生ける者として、その白樺の物語をこころの内に枯らさずに生きて行けるかどうかという意味になるでしょう。それが、この世を生きることだと、安部公房は歌っているのです。

こうして、もう一度『天使』の終りの笛の音の聞こえるところに戻って、今度はその散文の個所を見てみましょう。

「何故か心の奥底、と言うよりは、私の想出そのものを其処で繰返えしている様な魂の波を激しく攪乱した。丁度静かな池に石を投げて出来た、次々に広がって行く波紋の中心を見詰めている様な、気分だった。次第に現れて来て、明瞭に其の存在を感じはするのだが、どうしても正確には捉えられぬと言う様な。」

「心の奥底」とあるのは、確かに湖の底に沈んだ白樺に通じる譬喩（ひゆ）です。これが安部公房の詩の世界の連想であることは、上の散文の個所の引用で、湖ではありませんが、池という言葉を使っていることから、その関係を理解することができます。池や湖の底に沈んで行く石と、その石の生じる水の表面に起きる波紋とその波紋の中心（つまり、石が水に落ちた場所）という関係です。

2. 枝を手折る

さて、ここで少し視点を変えて、枝を折る、木の枝を手折るという行為の意味について見てみましょう。

『霊媒の話より（題未定）』に、既にこのモチーフが出て参ります（全集第1巻、26ページ上段。1943年、安部公房、19歳）。主人公のパー公は、ある村を曲馬団の興業で訪れて、舞台上自分の演ずる間にふと観客である二人の子どもに目が行き、そこで思ったことが、次のように語られています。パー公は親の無い、サーカス団に拾われた子どもとして設定されています。

「両親に連れられた楽しげな二人の子供達だった。失われた人々のかすかな面影が再びそこに現れた様な気がしたのだ。震える様な不安と憔そうと、消えて行く様な悲痛と詫びしさが、失われ掛けた春の光を、手折られた小枝の若芽を、もう一度湧出る激しい生命の叫びを呼び起こしたのだ。無言の、そして未

だ知られざる争闘が、過去の世界と現実の世界とを結び着ける為に、押し包まれて居た厚手のマントを押し開いて、新しい魂の舞台へと、「狂」の舞踏を始める為に跳り出したのだ。」

「手折られた小枝の若芽を」とある、このこような小枝は、「失われ掛けた春の光」であり、「もう一度湧出る激しい生命の叫び」、即ち、既に見た様に不死の永遠の生命そのものを意味していることがわかります。

即ち、枝を折るという行為は、失いかけた生命を取戻すという行為を意味しているということになります。そして、小枝を折るということ、折られた小枝の若芽ということは、失われたものを恢復する生命の感情を呼び起こすものとしてあるということになります。

これが、白樺の枝を手折って笛をつくるということの意味ではないでしょうか。

このように考えて来ると、『天使』の末尾に描かれた詩の意味は、

「白樺の二つ三つ
手折りて童 笛を作りぬ
遥かなる想いに答え
時に咲く紅の花 いざ咲けと
唇は笛を求めど
風よりも尚おひそかにて
笛は鳴らざる……」

と読み直すと、生命の恢復を願って、主人公が白樺の小枝を手折るわけですが、その笛は鳴らない、即ち、主人公は死者のままだという解釈をすることができます。或いは、狂気の状態から脱することのできない主人公の状態を表していると解釈することもできるでしょう。

謎の力を持つ白樺の小枝でそのような威力のある笛を製作したのだが、笛は鳴らなかった。この詩では、枝を折る行為者は、笛を吹いても直かに鳴らなかったというよりも、「笛を求めど」とあるように安部公房は歌っておりますから、とすれば、この笛には何か、ひとりでに鳴る自分の意志があるかの如くで

す。勿論、この「笛を求めど」を雅語と見て、直かに笛を吹くことをそう表し、一層笛の音の鳴らざる状態との乖離を表したと解釈することも可能です。

さて、『題未定（霊媒の話より）』では、ここから、「未だ知られざる争闘が、過去の世界と現実の世界とを結び着ける為に、押し包まれて居た厚手のマントを押し開いて、新しい魂の舞台へと、「狂」の舞踏が始」まります。

前回の『もぐら感覚16：贗の父親』で明確になった安部公房の贗と閉鎖空間の論理によれば、狂気ということから、ここから先主人公の意識には閉鎖空間からの脱出が意図される筈です。

『天使』では、確かにそのような意図（しかし無意識の）を以て、（脱出の通路である）窓辺へと近づく筋立てとなっております。（安部公房の概念化した窓については、この主題を詳細に論じた『もぐら感覚5：窓』をご覧ください。）『題未定（霊媒の話より）』では、主人公のパー公は、贗の老婆の役割を演じなければならないその家族という閉鎖空間を逃れて、失踪する結末となっています。

3。牧神の笛

安部公房が詩人から小説家になろうとしたときに書いた作品に、『牧神の笛』という、安部公房の芸術家人生にとって重要なエッセイがあります（全集第2巻、199ページ。1950年、安部公房、26歳）。

これは、大東亜戦争の戦時中にリルケを読み耽り、「時間の停止」した、「いや停止というよりも、遮断といったほうが、もっと正確かもしれない」「リルケ式冬眠の穴」（全集第21巻、437ページ）に棲んでいた安部公房が、リルケというドイツ語の詩人とその詩の世界をどのように考えたら、その戦後の、安部公房の言葉によれば「時間が、流れ、たしかに存在していることを」（全集第21巻、437ページ）知った時代に、小説家としての自分が生まれるのか、小説家としての自分は、詩人としての自分とどこがどう違うべきなのか、更にまたその両者を統一して考えるにはどのように考えるべきなのかを考察した作品です。

そうして、この作品のキーワードが、題名にもなっている「牧神の笛」なのです。

このエッセイを読みますと、リルケという詩人の人間としての我がままな側面、冷酷で酷薄で非人間的な側面に、安部公房は気付いたことがわかります。それも、時間の流れる日常があり、また人々と交流をして、時間の中に生きている人間にとっては重要な「約束の意味」、約束を守ることを意味をほとんど初めて考えなければならなかった若い安部公房の姿が、ここにあります。リルケの孤独から生まれた純粹空間は、社会とは無縁で、従い、この空間の中では、約束など顧慮することがありません。

安部公房はそのようなリルケを、時間のなかで生身の人間として生き始めた時に知って、憤り、リルケに憎悪の感情を持っていることを隠さずに書いています。このエッセイは、この感情を克服するために書かれたといってもよいのです。

従い、ここでは、リルケは「フォーンのようにわがままなねがいばかりを生きていたのだと考えられはしまいか。」と書かれています。リルケを牧神（フォーン）に譬（たと）えています。

即ち、リルケのように棲む世界が非日常の、時間を捨象した静謐な純粹空間に生きる牧神（フォーン）の吹く笛が、牧神の笛であるということです。

そして、安部公房は、リルケから学んだ「小さいもの」を歌うこと、即ち詩と、「小ささ」を考えること、即ち散文（小説）との区別をして、詩人から小説家へと脱皮しようとするのです。何故ならば、安部公房によれば、小ささとは、日常において捉えられるものであり、小さいものは、非日常の世界のものだからです。従い、小ささを知っている自分には愛があるが、それを知らないリルケには愛はないと断定するのです。

このように、リルケの言葉の世界は、そもそもが日常の世界のものではないのだから、それは「リルケを乗り越えられるべきものなどということはまるで無意味なのだ」と結論します。こうして、リルケを生かしたまま、否定することなく、また超えることもなく、10代の自分のところを生かしたまま、安部公房は小説家に変身し、変容するのです。

さて、ここで、安部公房は、やはりリルケの『マルテの手記』に書かれている

外部と内部の交換に言及せずにはられません。それは、次のように書かれています。

「もしかするとリルケの世界では内部と外部とがすっかりいれちがいになっていたのかもしれぬ。たとえば、内容にとりかこまれて、内がわに外気を入れるガラス玉の気泡のように。そこでは恐らく内部が客体となり、ぼくらは内部をもの（原文傍点）として共有し、外部を主体にゆずってしまう。あるいはその反対のように……、ぼくにはもうそんな具合にしか考えられないのだ。人間的なものはすべて裏がえった顔であり、それに合わせて自己を裏がえそうとする試みだけが詩ではないだろうか。」（全集第2巻、201ページ下段）

この思考は、詩についての言及であるにせよ、やはり、詩を書く事と散文を書く事が同じ原理、外部と内部の交換という原理によって書かれていることを示しています。詩文の裏返しが散文であり、散文の裏返しが詩文であるのでしょうか。安部公房は、次の言葉でこのエッセイを締めくくっています。

「結局、ぼくのいきどおりも、その凍りはて裏がえったフォーンの快活さにたいしてであり、それは同時に、ほかでもないぼく自身の足どり、ぼくの血を吸おうと待ちかまえるぼく（原文傍点）自身へのいきどおりにほかになかったのではなかろうか。ぼくもまた、フォーンの笛を吹かねばならぬのだ。」（全集第2巻、202ページ上段から下段）

これは、安部公房が自分自身を、リルケをフォーンに譬えたように、やはりフォーンに譬えて、自分自身の外部と内部を交換し、また主体と客体を交換する、この創作原理に基礎を措いた、結局（リルケのように）人間ではない人非人の自分を十分に自覚して、牧神の笛を吹くことの覚悟を示した文章です。

また重要なことは、「ぼくの血を吸おうと待ちかまえるぼく（原文傍点）自身」とあるように、安部公房が自己参照的な、再帰的（recursive）な思考と感性の人間だということです。安部公房はいつも自分自身を参照します。上に引いた『没我の地平』の『光と影』では、「無名の吾」を姿見（鏡）に比しておりました。安部公房は、このように再帰的に自己を参照するのです。これは、安部公房のすべての主人公に共通の意識、思考、そして感性です。

さて、そして、人非人の自分とは、勿論、リルケの純粹空間に憧れ、それを創

造しようとする詩人としてもある安部公房自身のことには他なりません。

そのような牧神が、上の1と2で見て来た笛を吹くのです。

これが、牧神の笛の意味です。

このように理解することのできる牧神の笛は、『名もなき夜のために』に出て来ます（全集第1巻、512ページ）。

ここでは、手について、手が意志ある生き物のごとくに述べられていて、その次に次の様な文章が続きます。（安部公房の手については、『もぐら感覚6：手』をご覧ください。）

主人公の手に関する考察に手が気付いて、手は「まるで人ごとのように業とらしく痙攣した。僕には、その、自分が何かに支えられていたのに初めて気づいたのだとでも言わんばかりの、そしてそれを確かめなければとでも言わんばかりの仕草が、如何にも主人の中の人間を認めたドレイの侮蔑のように思われて悲しかった。」とあり、そして、次の一行が来ます。

「自分自身の上にしか落ちて行けない地球のように、石と粘土の廃墟をさまようパンの神のような哀しさだった。結局僕はなにも書けなかった。僕にはまだ現在を充分手元に引きとめる力がないのだろうか。」

パンの神とはフォーン、牧神のことです。このパンの神は、廃墟を彷徨う、荒れ果てた土地に行く、孤独の神であり、その分人非人であり、この世の人ではなく、「自分自身の上にしか落ちて行けない地球のように」再帰的に自己参照的です。

この牧神の笛は、『詩と詩人（意識と無意識）』という論文の中にも「真理とは曠野に流れる芦笛の音」であるとして、芦の笛として出来ます（全集第1巻、107ページ下段）。1944年、安部公房、20歳。

ここでも、この笛の音によって知られる真理は、「真理は常に自己否定によって次元転換をなす」（全集第1巻、109ページ、上段）と、論理の世界でも、自己参照的であり、そのように語られているのです。

そのような荒野や廃墟という非日常の世界に棲む人間ならぬ人非人の人間が、自己否定の笛を吹き、否定的に次元変換をして、変身をするのです。次元変換とは、この論文に明らかなように、自分自身を含んだ外部と内部の交換のことであり、主体と客体の交換のことです。

こうして1、2、3と考察して参りますと、10代までは、自分の外部にあり、憧れであった永遠の死の、また不死の世界の、湖底の白樺で製作した小枝の笛が、20歳の『詩と詩人（意識と無意識）』、そして26歳の『牧神の笛』を経過して、自分がその永遠の廃墟と荒野の世界に入っていく（湖ではなくなり、地上になります）、そこで孤独に演奏をする笛とその音色というように変わっていることが解ります。

しかし、その笛を演奏するということの意味は、やはり『題未定（霊媒の話より）』のときから変わらず、生命を取り戻し、復活し、恢復し、蘇生するという効果をもたらすものであることに違いがありません。

そうして、『牧神の笛』を読むと、そこには同時に、小ささを思考する、安部公房の、安部公房独自の愛があり、このように独自の愛のあり方があるということ忘れてはなりません。

4. 『唾のむすめ』の笛

以上の考察を元に、小説の中の笛を見てみましょう。

『唾のむすめ』のなかに、次のような対話の個所があります（全集第2巻、286ページ）。1949年、安部公房、25歳。

「—でもみんな、私の声を笛のようだといって笑います。

—笛……結構なことではないか。愛の言葉は甘い囁きといわれるように、笛のようにでも囁けば効果は一団と高まるにちがいない。春の微風のような笛の音の中で、恋人たちは眼を閉じて囁きまた囁きかえす……結構なことだ。

—囁きって、どんなものでしょう？

—一人の魂の奥底まで吹き込む風のような言葉だ。」

ここを読みますと、こうして、笛を吹くということが、やはり、上で見たように、愛との関係で語られていることが判ります。

既に見て来たように笛の音は、この世のものから鳴り響く音ではありませんから、愛の囁きが笛の音であるとは、既にして愛がそのようなこの世のものではなく、そういう意味では、永遠の、死の世界の愛であるということになるでしょう。これが、安部公房の逆説的な、笛という視点から眺めた、愛です。

そうして、やはり、「人の魂の奥底」というのは、上で参照した『没我の地平』の『光と影』や『天使』の末尾の散文の個所に同じです。笛を思うと、安部公房は、何かの奥底を連想するのです。それが、湖底であれ、池であれ、人間の魂の奥底であれ。

このように、安部公房の愛は、いつも死と背中合わせです。

5. 『R62号の発明』の笛

『R62号の発明』に、主人公がロボットになったあとに、色々と試験されるところで、次の様に笛が出て来ます（全集第3巻、421ページ下段から422ページ）。1953年、安部公房、29歳。

「所長がさらにダイヤルをまわし、また草笛の音がした。するとR62号君の気分はページをめくったような唐突さで変化した。こんどは急に落ち着きをなくし、そわそわと立ち上がり、何か大事な忘れ物をしたような気がするのだ。」

ここでは、草笛が出て来ます。この笛が鳴ることが、「何か大事な忘れ物」を思い出させるようです。これは、湖底の、姿を変えた白樺の木ではないでしょうか。それが証拠に、この草笛の音は、やはり歌と結びついて、この小説の中では、詩を呼び出す役割を演じています。次のような詩が歌われます。

「涙をうかべた青い雲
母さん雲にしかられて
お山をこえて行きました

うたってみると、不思議なことに、彼のまったく知らない歌なのだ。知らないくせに、歌と文句が、次から次に自然に出て来る。所長とドクトルが嘖きだした。歌っているあいだじゅう、笑いつづけた。」

これも確かに、主人公がその心の底から思い出された、日常の世界では忘却されている歌のひとつなのでしょう。そうして、その歌を歌うと、この世では笑いの対象となるということ。世人には理解されない、逆の効果をもたらす誤解を受ける、主人公の愛が、ここにあるということになるでしょう。

6. 『第四間氷期』の笛

『第四間氷期』にも、その小説の最後のところ、主人公が死を目前にしている局面、外部と内部がすっかり交換されて、それまで身近にいて自分の部下だと信じていた人間達が、別の外部の組織の人間達であり、しかもその組織によって、コンピューターの予言通りに殺される場面で、笛が出て来ます（全集第9巻、168ページ下段）。1958年、安部公房、34歳。

「「気が遠くなるくらい、遠いな……」

後ろで誰かが呟いた。山本氏らしかった。本当に遠い……未来はまるで、太古のようにはるかなのだ……きゅうに胸がふるえて、はきだしていた息が逆流し、喉の奥で壊れた笛のような音を立てた。」

ここでは、未来という時間と過去という時間のそれぞれの長さが、コンピューターという預言機械によって交換され、二つの無限遠点の間に存在する人間が意識されていて、言わば空間的な無時間、または安部公房の好きな言い方を言えば、時間の空間化の行われるここで、笛の音が（直喩ではありませんが）聞こえるのです。

[註]

この予言機械たるコンピューターが、実は主人公、勝見博士の意識の総体であり、言わば鏡に写した自分自身の姿であったということ、或いは逆に、勝見博士がコンピューターの姿見であったということ、ここでも思い出すことにしましょう。即ち、主人公の自己の在り方が、上の1で引いた『光と影』という詩の「無名の吾」の在り方と同じように再帰的、自己参照的であることを。これは、他の小説に於いても同じであり、安部公房の小説の主人公の典型的な特徴です。『第四間氷期』の予言機

械たるコンピューターは、『光と影』という詩の「無名の吾」であるということが出来ます。

「壊れた笛」という、この「壊れた」という形容が、既に主人公の死を意味しています。「壊れた」という形容をしたので、安部公房は、笛が鳴ったと隠喩を使わずに、「笛のような」という直喩を使ったのでしょう。もし「壊れた」という形容をしなければ、安部公房は、喉の奥で笛が鳴ったと書いたことでしょう。安部公房がそう書かなかったほどに、勝見博士は死ぬべきであったということになります。

以上の1から6までを考察して来て、笛の鳴る契機は、時間が無時間になる、時間が空間化される場所だといってよいでしょう。そこは、同時に（同時にとは何か、です）、意識を有する当人を含んで、外部と内部が交換され、主体と客体が交換される場所でもあるのです。そして、そこに笑いが生まれ、通り一遍ではない愛の証明がなされる。そして、外部と内部の交換とは、往々にして、生と死の交換を意味しております。

7. 『カンガルー・ノート』の笛

10代の詩の世界から、安部公房の何十年もの人生を閲（けみ）して、笛とその音色は生き続けます。1991年、安部公房、67歳。

この小説には、3度、笛という言葉が出て来ます。

一つ目は、チベットの笛

二つ目は、やはり、草笛

三つ目は、「喉を笛のように吹」いて出る声の音色

最初の笛は、「2. 緑面の詩人」に出て来ます。主人公が栈橋のところにいて、船が近づいて来て、その中に入って叫びます。

「誰か、いませんか？」

天井のアーチは、残響効果を強める構造になっているらしい。ぼくの声は意味なく拡散し、壁から壁に反響を繰り返し、チベットの大笛に負けないほどの咆哮になって鳴り響いた。」

この「誰か、いませんか？」という、チベットの大笛にも負けない笛の声は、やはり、この世ではない世界の声であるのでしょうか。確かに、カンガルー・ノート的主人公の巡る空間から空間への旅は、この世ではなく、あの世というべき、異空間の、地獄巡りとも言うべき旅であり、そして、この空間は、上の引用にもあるように、残響の激しい、沈黙の、静寂の空間であり、そういう意味では、リルケの純粹空間を安部公房が小説の世界で再現したような、従い、その音もまた沈黙の音であるといってよい音になっています。

この引用の前段には、安部公房の好きなピンク・フロイドのアルバム『鬱』の出だしの「櫓を漕ぐひそかなきしみ、船縁をたたく水の音」が出て来ます。この音をYouTubeで聞きますと、やはり沈黙の音という音に聞こえます。：

https://www.youtube.com/watch?v=r_HqqL43TD0&list=PLFABDED4BA02D97A9

二つ目の笛、草笛は、「6. 風の長歌」で出て来ます。この題名からして、笛の音は、既にこの『カンガルー・ノート』の世界では、風の音になっているのでしょうか。そして、笛との連想から、やはり風の音が、長歌という歌（詩）に繋がっていることが判ります。

「はい、体温計……顎の氷嚢、替えましょうね」

「すごい風ですね」

「風？」ちょっと小生意気な印象は、ピーナッツみたいな小鼻のせいだろう。

「あれは屋上の冷房タンクの音よ、いかれかけているんだ……」

「そういう音じゃなく、空いちめんに……たとえば、何百個ものハーモニカを撒きちらして、肺が焼けるほど力一杯吹き鳴らしているみたいな……」

「キザなこと言うじゃない」

「ぼく、草笛がふけるから」

「そんなにおしゃべりして、痛くないの？」

「喋るのは平気みたいだけど、なぜか鼻血が止まらないんだ」

こうして、安部公房の概念化した笛を見て来て、主人公と看護婦のこの会話を讀むと、草笛を吹くとは、自分が死んでもいいのだという意味に理解することができます。そうして、この会話を讀むと、実に切ない、しかし、距離感のある、そしてお互いのこころの通じた、安部公房らしい、いい会話になっています。

す。

三つ目の笛も、草笛と同じ章に出て来ます。夜になって消灯のあと、いつも聞こえて来る老人の苦しみの呻き声です。

「喉を笛のように吹き、老人の呻きは、しだいに哀願の調子をつよめてきた。」

とあるように、既に老人ということから、死の笛の音だということがわかりますが、ここまで何気なく枯れた書き方にできるほどに、安部公房は笛とその音色を自分のものにしたということなのです。

「喉を笛のように吹き」と、直喩を使っていることから、既に『第四間氷期』で勝見博士に見たのと同様に、この老人には間違いなく死ぬべき運命があることを明確に示しているのだと解釈してもよいでしょう。

ここまで明瞭な死の笛の音もまた、遂に至った安部公房の愛の笛の音なのだと思います。

次回は、安部公房の部屋を論じます。



読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。

メール配信担当：岡篤史（wlallen）

稲垣健様より

岡様

はじめまして、稲垣と申します。

安部公房については中毒症状となっており、なぜそうなったのかも未だによくわからない状態です。

ただこの病いは孤独で、ひとに話しても理解してもえず、土堀に向かってひとり呟くだけでした。

そんな中、「安部公房の広場」に出会い、孤独ではないとふと思いつつも、なにか距離感を感じて時間が過ぎていきました。

そして、昨日、ふと気づいたら「もぐら通信」をお願いしておりました。

でも、相変わらず、便器に足をとられた状態で、身動きができません。足が抜けましたら、文章を寄せさせて頂きたいと存じます。

よろしくお願い致します。

九堂夜想様より

岡 篤史様

先刻は「もぐら通信」第14号ご送付、誠に有難うございます。
いつも楽しみにしております。現在、バックナンバーから目を通しており、最新号に至るに少し時間がかかりそうです。
また、あらためて感想などをお送りできればと思います。
ひとまず、お礼まで。

九堂夜想拝

感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んでの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思います。

編集部一同、ここからお待ちしております。

内藤由直様より

岩田英哉様 「もぐら通信」編集部御中

第14号拝受しました。いつもお送りいただきありがとうございます。
素早く情報更新できるのは、WEB版の雑誌ならではのですね。
また次号も楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

内藤 由直/ NAITOU Yositada

巽孝之様より (twitterにて)

Takayuki TATSUMI @t2tatsumi

安部公房ファン雑誌『もぐら通信』14号ではwlallenの樋口直哉『さよなら アメリカ』評に共感。文学的遺産継承への洞察が鋭い。ちなみに 2005年にはわたし自身の共同通信文芸時評で、同作品に「ポスト安部のみならずポスト阿部、つまりポスト阿部和重の可能性を感じた」と記している。

奥村飛鳥様より

岩田さん

急に寒くなりましたね。如何お過ごしでしょうか？
岩田さんを始め、もぐら通信の皆さんの感想文、
嬉しく拝読致しました。
私としても、この様な形で公演について発信できる
ことは有り難く、又、励ましにもなります。
素敵な機会を頂いて、ありがとうございました。
今後とも宜しくお願い致します。

Asuka Fey Okumura 奥村飛鳥

そのほか高旗浩志様、山田久美子様、キーン誠己様、
鳥羽耕史様、澤井佳彦様からのご感想やお便りを
いただきました。厚くお礼申し上げます。



【合評会】

第14号の合評会を11月14日から、「もぐら通信掲示板」で開催しました。
<http://8010.teacup.com/wlallen/bbs>
 第15号の合評会も同様に行いますので、読者の参加をお待ちしています。

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、大江健三郎様、平野啓一郎様、辻井喬様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の収蔵機関】

日本近代文学館、コロンビア大学
 東アジア図書館、国立国会図書館



【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。

2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。

3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。

4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解説工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://wlallen.seesaa.net/article/379058512.html>



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

「思えばあつという間でした」という言葉をよく聞く。けれどそんなわけではない、と私の心の内で言う声が聞こえる。たとえば10年、あつという間だったと言うなら、ではこれからの10年もあつという間ですね、人生80年でもあつという間になりますね、あつと思う間もなく生まれてあつという間に死ぬんですね、と天の邪鬼なことを思ってしまう。なるほど頭の中の記憶では、ここからここまで途中を飛ばして何十年でも「あつという間」に飛ぶことが出来る。

でも私自身はいつもギリギリに生きているように思う。そして明日のことさえわからない気がする。「もぐら通信」のこの1年でも、毎日奮闘し、苦闘し、また逆に予想外の嬉しいこともいろいろあった。そんな日々を「あつという間」という言葉で飛ばす気にはならないのです。

[OKADA HIROSHI]



今回は、食べ物のお話です。私は、好き嫌いは少ない方ですが、ゆでたまごが苦手なのです。といっても、卵が嫌いなわけではありません。玉子焼き、目玉焼き、スクランブルエッグ、温泉玉子などは、普通に食べられます。ゆでたまごを敬遠するのは、自分の好きな黄身が白身で幽閉されているからです。どうも、白身のぷるっとした食感と味の無さが受け入れられないのです。スライスしたゆで卵なら、黄身が見えるので、安心して食べられます。

つまり、視覚と食感から、ゆでたまごが苦手なのです。この話を何人かの友人にしたところ、皆キョトンとした顔をしていました。多分、読者の方も共感される方は少ないと思います。さて、おでんの季節になりましたが、我が家では、当然私の分のゆでたまごはありません。

[wlallen]



●さすがに寒気のせいかと思う。風邪をひいてしまった。医者に行き、薬を貰いなんとか直す。●相変わらずスマートフォンの話です。ハマっています。ドイツのラジオ放送曲が沢山あり、それをスマートフォンのアプリをダウンロードしてインターネットで聴く事ができるのです。これは凄いことです。何しろわたしがドイツ語を学んだ頃はラジオでドイッチェ・ヴェレというドイツの放送局をラジオ受信機のアンテナ立てて、あっちへ向けこっちへ向けして受信を調整しながら苦心して聴いていたのですから。ソニーの小型ラジオでした。それからドイツ語のカセット・テープ。それが今は電車の中でも歩いていてもリアルタイムでイヤフォンで聴く事ができます。凄い時代だなあと感じます。●安部公房の大好きだったマリリン・モンローの有名な科白で、寝る時にはシャネルの5番を着て寝るといふのがあります。ある広告業界の週刊新聞を最近見た所にあれば、これまで記事としては記録にあったこの科白ですが、最近未発表のインタビュー録音の音源が見つかり、この中では「眠るときにはシャネルNo 5を数滴」と確かに言っているそうです。

[タ克蘭ケ]



【編集後記】

今月の大きなニュースは、もぐら通信がコロンビア大学の図書館に収蔵されるという知らせでした。今年の10大ニュースなどということを考える時節になりましたが、このことはもぐら通信の今年の10大ニュースの最初に来ることでしょう。キーン先生に感謝申し上げます。もぐら通信の最初の号から数えて、これで早や第15号。感慨の深いものがあります。読者も少なく見積もっても600名を超えております。これもお寄稿の質の高さが為せる業（わざ）と、これまでお寄稿戴いた方々には、この場を借りて感謝申し上げます。/来月は京都と東京でKAPとTAPが読書会を開催。両パーティーの益々の発展を祈ります。/あなたもどうぞお寄稿下さい。ご遠慮なく。どんな一行でも結構です。一生懸命に生きることの苦しみ、言葉を愛し、論理を愛し、文学を愛し、安部公房を愛するあなたのために、これからも発行を続けます。ではまた次号でお目にかかります。[タ克蘭ケこと岩田英哉]

もぐら通信編集部 連絡先:

差出人:
廣安部公房

〒182-0003東京都調布市若葉町
「閉ざされた
無限」

次号の原稿締切は12月27日です。お寄稿をお待ちしています。

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 『密会』の都市論：OKADA HIROSHI
2. 『R62号の発明』小論：wlallen
3. もぐら感覚18：部屋：タ克蘭ケ
4. 安部公房の変形能力15：安部ヨリミ：岩田英哉
5. その他のお寄稿

安部公

第二版改訂箇所

次の個所を改訂し、この第二版を発行致します。

1。 P57：「安部公房の変形能力 1 3：シュールレアリズム」

57ページ冒頭に「また、『錨なき方舟の時代』でのインタビューに答えて、安部公房は、自分自身の実存に」という一行が欠けておりましたので、追記しました。

